

始



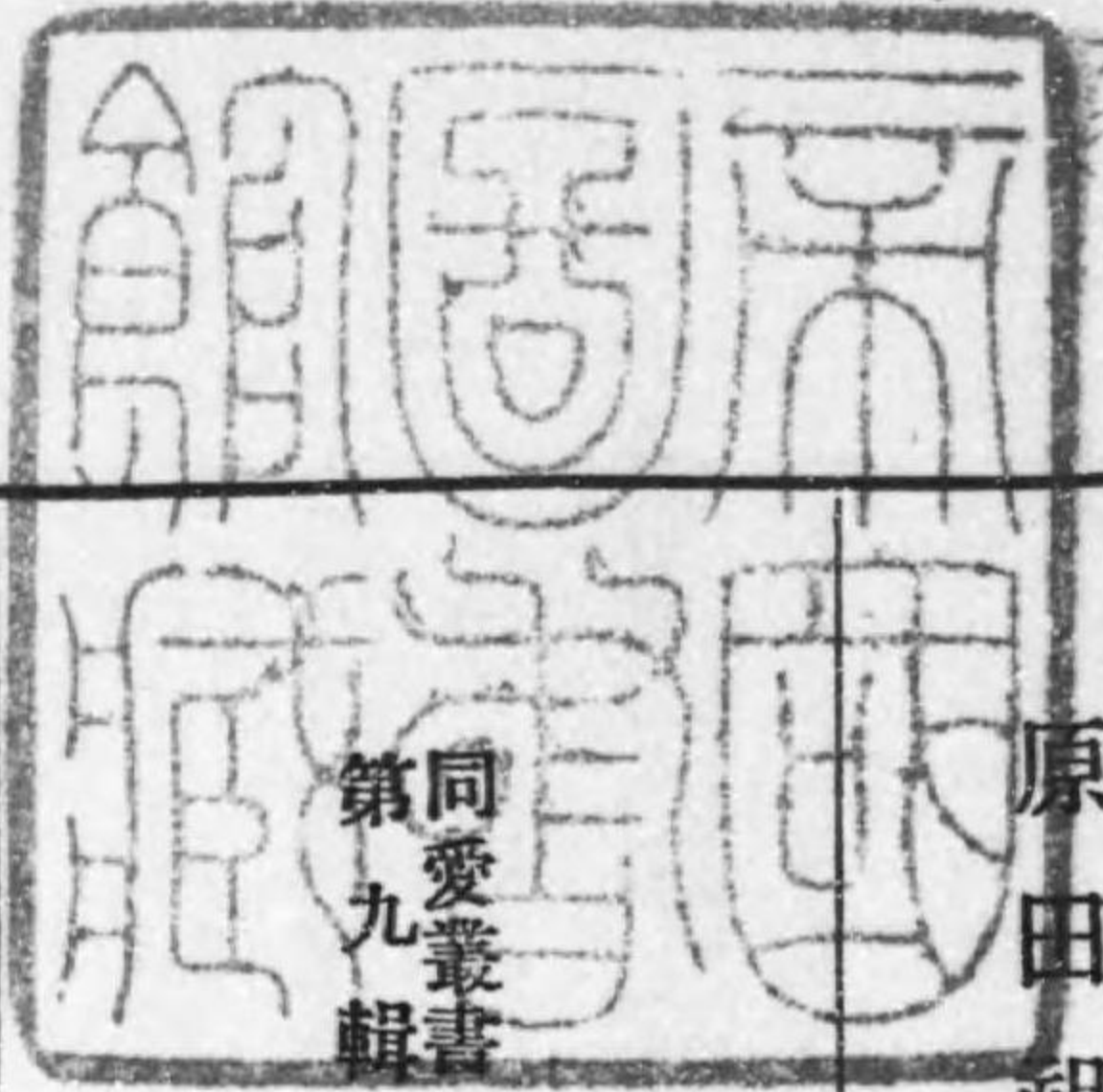
特219
814

第九
叢書
輯

隨感隨筆集 (上) 原田祖岳著

東京
信正同愛會發行

特 219
814



原田祖岳著

同愛叢書
第九輯

隨感隨筆集
(上)

東京
信正同愛會發行



序

たゞ時々ときどきの感かんに觸ふれて、思おもひ浮うんだ事ことを筆ふでに任まかせて書かくのであるから、何事なにごとが出いて來きるか分わからない。されど大法護持だほごの外ほかに決けつして出いないことは云いふまでもない。要よするに令法久住りやうほくじゆう、興正護國こうせうごこく、國民皆禪こくみんがいぜんのための妄想百出もうそうひやくしゅつに外ほかならないのである。

大法の陵夷りやういはたとへ教經けうきやうと祖錄そろくを研究けんきゆうするも、正師せいしに就つて禪旨ぜんしに參徹さんてつすることを知らないものが多い。知らないから教經けうきやうと祖錄そろくの眞意義しんいぎを把握はあくすることが出來ない。出來ないから邪見じゃけんや偏見へんけんに陥おるのであり、設令たとへまた禪旨ぜんしに參まずるものも教經けうきやうと祖錄そろくを正師せいしについて研究けんきゆうをせないから、禪道ぜんどうの眞精神しんせいしんを究きめることが出來ないで、還かへつて天魔外道てんまがいどうの邪禪じゃぜんに陥おるのである。

だから古人こじんは屢々しばしば或從知識おんじゆくしやくと或從經卷おんきやうきやうを双翼双輪さうよくさうりんの如ごとく併修へいしゆせよと道みちはれるのである。

何となれば禪は是れ佛心にして經は是佛語であるからである。佛心を知らずして佛語を見、佛語を究めずして佛心を窺はんとするも、格別の大道人でない限り全く不可能事であるからである。

然るに佛心（禪旨）と佛語（聖經）と併に祖心（祖錄）と祖語（教相）を手落ちなく、而も正師に就て研參し得る者は至つてすくない。従つて佛祖の心身を正しく理解し、佛祖の心身を正しく信修し、佛祖の心身を正しく證契するものは、一二百年來全くすくないのである。

今や禪教兩宗の出家も、在家も、また學者も正しき佛祖の心身を信解し、行證するもの殆んど之れなきが如し。その因つて來るところは正しき師に就て禪經を參研せないからであらねばならん。

されど佛心と佛語と祖心と祖語を、正しき師に就て親しく咨問し、深く參研すると云ふことは、一般の人としては實に大難事であるのである。

この大難事を濟ふて、邪路に陥らない様にするのは、宗師家の時々の垂示と普説の力に待つより外に道はないのであるが、其の普説や垂示を聞くことも誠に容易でない時代である。

そこで此の隨感隨筆の如きは、甚だ貧弱ながら完全なる垂示及普説を拜聞することの出来ないところの諸々の好道の大士のために、正信正解正證の方路を明さんとする婆心に外ならない。以て彼の古聖先徳がたの垂示及普説を歡喜聽受することの出来ない求道者のために、聊か其の缺點を補はんとする微哀に出たものであつて、好道の諸仁者のために少補なくんばあらずと思ふ。

天橋々畔松溪山下に於て

昭和十乙亥年初秋

大雲祖岳謹誌

同愛叢書 第九輯 隨感隨筆集 目次

一、正信八ヶ條……………	一
二、それ果して見性か……………	九
三、それ果して菩提心か……………	一六
四、それ果して參禪學道か……………	三三
五、僧寶の使命……………	六六
六、殺人刀活人劍……………	七〇
七、禪風大觀……………	七九
八、修行時代の追憶……………	八三
九、納僧の修行時代……………	九〇
一〇、先師の遺訓を偲ぶ……………	九四
一一、托鉢の精神……………	一〇〇
一二、森田悟由禪師の德行……………	一〇六

隨感隨筆集 (上)

原田祖岳 著

一、正信八ヶ條

修行者は先づ常に通佛敎の敎理を知つて置かねばならん。是が佛法を信ずる前提であり進んで佛道を修行する本であるから。要するに佛敎の本旨を知るのが根本である。そこで全體、佛敎は何を敎へて居るかと言ふ事を理知的に其の要領を云へば、大體左の八ヶ條に分けて話をするのが一番よろしい。實は以前はこれを五ヶ條に分けて話をして居たのであるが、近來是れを八ヶ條に分けて話す方がよいと云ふ事に氣が付いて來た。

第一本具佛性、第二自我の迷執、第三生死輪廻(生命の持續)、第四因果必然、第五自他不二(人

法一如)、第六諸佛の實在、第七感應道交、第八成佛の過程。

第一の本具佛性を明かにしなければ、第二の自我の迷執も明にならん。従つて第三の生死輪廻も第四の因果必然も第五の自他不二も第六の諸佛の實在も第七の感應道交も第八成佛の過程も明かにならんのだ。故に先づ第一の本具佛性に通じなければならん。私は甚だ淺學寡聞であるけれども自ら體驗して信徹する所に由つて話をする。

第一の本具佛性を知れば成佛道の過程にある我れである事に氣がつく。これは大乘佛敎を通じての理論の大綱である。そのよりどころを分けていふと、本具佛性は起信論の一心の事であり、天臺の實相であり、華嚴の眞如である。是を消極的に説き明したのが般若の空敎である(無自性)。此の大乘佛敎の根據は佛性三昧である。即ち佛性のみである。

所謂本來成佛のことである。佛は是れを悟られたるに過ぎない。これは明ると云へば絶対に明るいし、大きいと云へば絶対に大きいものであるんだ。吾々は此の絶対的絶対大の本質を具有して居り乍ら現に眞闇な生活をして居るではないか。

これを無明といふのである。この無明が本となつて八萬四千の煩惱となるのである。その爲

に六道浮沈の闇黒生活を送つて居るのである。此の闇黒生活のために三毒五慾が生ずるのである。つまり自我の迷執の爲めに六道の生死輪廻をして居るのだ。だが分つて見れば生死とは吾人が因縁相續して時間的に活動する事である。とに角吾人はこれを知らんから一相堅執の我他彼此根性から六道輪廻の眞闇な生活をして居るのだ。生死とは要するに本來の佛心の時間的の活動を云ふのである。だから凡夫にも佛にも共に生死があつて因果のまに／＼動いて宇宙と共に生命は永久に存續するのである。是れを哲學的に論理的に説明したのが俱舍唯識等の諸論である。ところが起信の一心二門三大の説まで行かんと佛性論が説けない。唯識はこれを認めては居るがまだ二元的であるから比較すれば淺い。起信に至つて始めて一心法界即ち一佛性三昧を説き得てをるのである。

次に自他不二を知らなければならん。一切の關係に依つて一切が存在する。要するに一切がなければ我もない。我がなければ一切もない。之を簡單に云へば私の通身に一切が在り、一切の内に我がある。一即一切、一切即一是を絶対待と云ふのである。つまり自他不二の關係が分明すると感應道交の道理も分明する。佛は宇宙化されたる人格であつて我は佛の絶対智慧の太陽

に照され、絶對慈悲の雨の霑ひを受けて居るのだ。であるから我の本質（佛性）は何としても生々に追々と覺醒せずには居られん事となる。つまり盲目的ながらも宇宙觀的な人生的な煩悶が起り明徹なる安心立命的の慾求心が起つて来る。兎に角吾人は本質に佛性を有し且つ感應道交が行はれて居るから、いやが上にも之を知り之を悟り之を體現せずには止められなくなつて来るのである。そこで吾人は成佛道の富士の絶頂に向つて歩みつゝあるのである。是が佛の大綱要旨である。これで佛敎の宇宙觀も明かになつて来る。之れが佛法の思想信仰の大前提である。然るに今日我國に於てこの思想信仰を持つて居るものが果して何人ある。何處も同じだが、特に支那は一般社會的には全く地を拂つてゐるし、暹羅は社會的地位と尊敬心丈は行はれて居るが、今の八ヶ條の信念などは全くないやうである。つまり彼等の國は大體からいふと小乘佛敎だから致方がないが、さて實際からいふと我國でも既に殆んど佛敎は現に地を拂つてしまつたといふても可い。他の宗派はまだしものこと我が曹洞宗は殆んど佛敎がなくなつてしまつてをるやうだ。遺憾ながら何といふても他派に比較すると八ヶ條を信ずるものは殆んどない。嘘と思へば試みに曹洞宗の僧侶に聞いて御覽。要するに只今の我宗では通佛敎すら信じ

られないのだ。通佛敎の信念が成立せなければ宗門の佛法は成立しない。故に宗門の宗乘などは全々解りつことがない。こゝに哀むべき笑いごとがある。曾て高田師が存命時代の宗議會に於て、或る一議員が當路者に向つて高田師は釋迦宗を唱へ出すし、滑忽谷師は撥無因果を主張するし、當路者は何と思はるゝかと問ふた。すると當路者の答に曰く、何を唱へてもよいのが我が宗だといふて笑つたといふ事だ。先年の議會に何か教育の斬新な方法を攻究したいといふので、委員を擧げて攻究することになつて地方の寺院に其意見を徴した。其の内九州の或る宗議員が意見を書き送り、小衲の意見を求めてきたから、小衲は左の如く答へた。衲の學校教育に就ての意見は極めて簡單明瞭である。今のやうに四中學校で、宗乘余乘を廢して了ふならば、中學校は全々無用である。衲の時代には此様な問題は全然問題にならなかつた。大學も同じだ。眞の眞面目な僧堂で三年間みつしり坐つたものを中學校宗餘の教員とし、五年以上坐つた者を大學の宗乘の教授にする事。餘乘の方は此限りでないけれどもと主張したものである。此れ丈けぐらいの事はやれば必ずやれる事だ。かくすれば必ず宗門の思想信仰を一變することが出来ると思ふ。其れが證據には衲が大學に教鞭をとることになつた時、正法

眼藏を受持つたのであつたが、全然學生の頭には入らないで議論を吹き掛けて來るので祖錄に就て教授する事が出來ないので、先づ祖錄を離れて議論をしようといふ事にし、一學期間はまるで討論會の様であつた。それから後は次第々々に衲の話の話を聴く様になつて、一年程経つたら漸く四分の三位は坐禪の必要を信じ、成程と合點する様になり、それが二三百人位はあつたやうだ。其内で實際箇事を究明しやうとして正しき眞の眞面目な僧堂に安居したいと希望する者が四五十人にも達して來た。之れに依つても明かである。つまり火の出る様な修行振りで三年以上坐つたものを中學の教員とし、五年以上坐つたものを大學の教授にしなければ、佛法の精神宗門の安心は全く地を拂つて仕舞ふ事になる。それで衲は教授をして居る間に専ら其精神で指導した爲めに、愈々皆が其必要を感じる様になつたが、卒業間際になると眞に坐るべき僧堂を尋ねられるやうになつたが、その當時日本で眞に坐るべき僧堂が無いので多くは遺憾ながら臨濟に行つたものである。其れでは是非自分で理想的の僧堂を開かねばならぬと感じて、教授を辭して僧堂を開單する事に決心したのである。其れには一方大學から學生を僧堂に送り出す役目を果す者が必要である。今津氏が適任と思ふて話したら、それは結構な事だから衲が其の役

を引請け様と云ふのであつたから、愈々決心して教授を辭し僧堂を開くことになつたのである。が次第に熱が冷めて此頃は其の役目を果して呉れるものが全くなくなつた。今日寺院の収入は非常に減じつゝあるさうだ。正しき信念を求むるものが少なくなつたから其の爲に法衣を脱ぐことになつて來るのではなからうか。そこで衲は大むほん心を持つてゐるがそれはうつかりは云はれぬ。今や宗門の精神の地を拂はんとして居る秋に當つて、之れを雙肩に荷ふて行くものは吾人を措て他に誰かあると思へば、責任の重大なるものがある。法の盛んな時代には三十年四十年修行しても尙足らぬ程だが法の餘り盛んで無い時代には五年乃至十年も修行すれば充分に宗門を覺醒して行くことが出来る。僅か十年足らずで古人の修行の二十年乃至三十年以上もの働さを實際社會に於て現はすことが出来る。このことに就ては孟子もよい事を云ふて居る。曰く『其徳は古人の半ばにしてその功は古人に倍せん』と。そこで自衛的に考へても、社會教化の上から考へても、實に吾々はグズ／＼して居られんではないか。それには先づ躰を健康にして貰ひ度い、次に確なる信念の培養、それから修行と云ふ順である。要するに八ヶ條の信と云ふも實は一ヶ條である。どの一ヶ條を信するにも他の七ヶ條を信じ

得られなければどれも信徹する事は出来ない。またどの一ヶ條でも眞に信ずれば他の七ヶ條は完全に信じ得られる。一即八、八即一であるからである。否一即無量條、無量條即一佛性であるからである。

機は良材の如く師は工匠に似たり。假令良材たりと雖も良工を得ざれば綺麗未だ彰れず。假令曲木と雖も若し好手に遇はば妙巧忽ち現はる師の正邪に随つて悟りの眞偽あり之を以つて曉るべし。

—學道用心集—

二、其れが果して見性か

見性とは我を見破ること、我本質を悟ることである。我本質の無性なること、無我なること、不可得なることを悟るとともに、無性、無我、不可得體であるから因縁幻生して觸所に一體一枚一杯の神通妙用あることを悟る。これが見性底の人、大解脱底の那人と云ふのである。

いま且く見性を分けて見ると、前者を根本智或は平等智と云ひ、後者を後得智或は妙觀察智と稱する。既に無我なれば何時でも何處でも、大満足の生活が出来るとともに何時でも何處でも足ることを知らないので、釋迦も達磨も今なほ無底の藍子に無味の飯を盛り持ち來つて純一の行化三昧であらせらるゝのである。故に臨濟徳山は猶悟道の尿臭兒で未だ綿密宗旨は夢だにも知らず、大燈國師大悟大徹ののち、猶四十年白崖山窟にあつて修練せられたが、靜坐山和尚はそれでも出化を許されなかつた。

然るに今時見性と稱し、大悟底の人と自稱して、ただ飯に逢ふては飯よ、茶に逢ふては茶よ富貴に處してはただ富貴たれ、貧賤に處してはただ貧に安んずればよい。貧に安んずれば世界

一の富貴だ。足る事を知れば誰でも福の神である。健全なればただ健全に安んじ、病弱なれば病弱に安んじ病者の幸福と病の尊さを念として健者を羨むな。ただ縁に任せて前後左右を顧みる勿れ、酒が飲みたければ金のあり次第買ふて飲め、性が慕はしければ意に任せて性を行ぜよ。這裡に至つて好悪長短を念ずれば即ち差過す。好悪長短を思はねば大解脱の三昧、本分の現成公案にあらずして何ぞ。かくして上佛を禮せず、下衆生を憐まず、上下貴賤の見境もなく責務も同情も意志も情操もなくただ自儘勝手に生活をなすを以つて向上の宗乗となすものがある。與へて云へばそれも宗乗に相違はないけれども、それは動物の宗乗であつて未だ人間界の佛法には遙かに遠い、況んや菩薩地佛地の宗乗は全く夢にも見ざるなりと云はねばならん。奪つて言へばそれは悪平等空無の惡見であつて、はたまた全く佛法ではないと云ふべきである。其が果して見性であらうか。

若しそれが果して見性ならば、他の下等動物界の勇ではあるかも知れないが、人間界には全く誠められてゐる。眞正の佛法の見道は因縁性空、性空因縁であることを明めるのであるから時所位に隨他去し其必要に隨つて灰頭土面、神通妙用貧者に逢ふては貧を轉じて富貴を得るの

道を示し、病者に逢ふては其病を轉じて健康體に達するの道を示し奢侈淫逸の者に對しては禮節と勤儉を教へ、遊惰放懶の漢には勇猛邁進の氣魄を説き唯物唯心の偏見者流には身心不二と向上の宗教を指示し、一佛乘に歸家穩坐せしめなければならのである。一佛乘とは何か。三歸依である。永平曰く四念住是れ住所、三歸依是れ依止なり。又曰く、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なりと。一佛乘因縁に隨つて現成公案する、人生社會誰れか富を望み健康を欲求し向上進歩を要望せざる。然るに病弱はただ病弱に安んぜよ、下賤はただ下賤で満足せよと云ふに至つては動物界の宗乗にも合格はいたすまい。動物界でも動物界程度の健康を望み富を求め、向上を要求して止まざる事は、動物學から見ても進化論から見ても既明の事實である。これを本能的と云ひ衝動的と云ふのであるが、然し決して單なる衝動本能とのみ見るべきでない。ただ人類程度の分別意識が發達して居ないばかりで、彼等は彼等程度の意識的の要求であらねばならん。若しまた衝動本能眼を開いて見れば、人類のジタバタするのも、考へるのも進んで佛祖の行化し給ふも皆是れ本能衝動である。若し意識的作用論から見れば、佛祖も人類も動物もみな意識作用上の要望でないものはない。

然るに本分に徹する以外の事を一向知らず、却つて人の衝動的にも、本能的にも、意識的にも要求する健康も勤儉も富裕も否定し去つて只其場に安心せよ。とのみ云ふに至つては動物以下の宗乘には合格するも、少なくとも人間界の佛法には遠して遠しである。佛は富を得せしめんとし健康を得せしめんとし、上昇の妙果を得せしめんとして、至る所の經卷に懇切周到に其道を説示し給ふてゐる。永平曰く「人界の佛法を明むと雖も、いまだ天界の佛法を知らず、天界の佛法を明むと雖も、いまだ聲聞辟支佛菩薩道の佛法を知らず」と示されてある。動物以下の佛法を明めてただ其場に安住せよとのみ力説しても人界には全く害あつて益なし、彼等は須く動物界に去るべし、彼等の禪が盛んになれば人界はただ墮落退嬰の一路をたどるのみである。彼等には人類の要求と悲惨事が眼に入らないとすれば、解脱に似て實は解脱を證して居らぬのである。動物禪と云ふ一種の個性を妄認して居るだけだと云はねばならぬ。若し無性無我觀成就の人、現成公案體驗の人であれば健康を要求し富裕を要求する。嬰兒の泣き聲を聞いては默然としては居られない筈である。誠の親の親である以上其の富と健康とを與へないで居れないのである。本來與へて益なく害あるものは與へないが、與へて害なく益あるものであれば衝動的にも與へずして居れるものではない。

かくするのが現成公案にあらずして何ぞ、解脱三昧にあらずして何ぞ。然るに貧に安んぜよ病に安んぜよと云ふに至つては、飯に逢ふては飯を喫せよ。茶に逢ふては茶を喫せよと云ふことを會すが如くに似て實はいまだ眞の逢飯喫飯、逢茶喫茶の妙道に達してゐない。相似固疾の禪である。換言せば逢飯喫茶の一面觀を相似に鵜呑にして、逢飯喫茶の他の一面を全然忘却してをるのである。

換言すれば逢飯喫茶の平等の一面のみを見て、差別の半面を全く知らないのである。例へば貧病者來つて貧病の苦を救へと云へば、貧病何の不可がある。貧病のとき貧病になり切れ、なり切つた時は貧病は貧病ながら貧病でないぞ。この時貧病そのまゝ世界一の健にして富者であるぞと云ふ一面のみ教へて、其貧病を人間的に事實上健康者と富裕者になるの道を知らず、説かないが如きものである。それは逢飯喫茶の平等の一面觀を相似に知ると雖も、いまだ逢飯喫飯の差別の一面觀を知らざるものと云ふのである。無論一切所に安んぜよと云ふ一面あるとともに貧病を救ふは菩薩の大慈悲行であるのである。法性の平等の理のみを知つて法性界の差別

相を夢にだも知らざる者は實に可憐可哀と云はねばならぬ。經にも看病の大事貧者を救ふの大事を苦ろ丁寧に教誡せられてある。

彼等が論法を以てせば社會の向上も不必要、國家の平安も別に求めるに及ばない。泥棒がすき、人殺がすきなればこれも不可あるまい。迷へる者も別に悟る必要あるまいと云ふことになる。

それが果して見性か。若し眞に見性底の人は性空の因縁と因縁の性空を知つてゐるから、一切處に安泰ならしめるとともに、事實差別相上に於て諸の苦惱をも脱せしめる大悲神力を具してゐる筈である。

性空の白紙には因縁の筆を持つて書けば如何なる繪畫も完全に書き得ることを知らしむるに外ならない。貧者には富者になるの道を教へる。病者には病魔を除くべき道を説くのである。病者を健康に貧者を富裕に、三毒を三徳に進歩せしめる事を上昇と云ふのであるが、しかし相似の禪者も眞禪人の眞似をして、時には上昇の因果を説かないでもないが、さて實際事實に當面すると、其の言は夢の如く忘却して、ただ病に安んぜよ、貧に安んぜよとしか説くことを知

らず、僅か現代の病理學の一部、皮相的經濟論の一面を説くのみである。單に病に安んじて死來れば死の全機現と觀じ去れ、生活苦來れば貧や全機現と明めよと云ふのみで因果無人の大獅子吼とは一體どう致したのである。試みに問ふ、因果無人の一眞實は現代科學で盡きてゐるか。若し十年五才の後現代が更に進歩したら、無人因果論は置き去りになるものであるか。イヤ科學の白紙には、因果の繪はいつでも描けると云ふ道理が分明すれば既明の實驗科學の夢想だにも許さぬ事も出來るといふ自信が起きるではないか。信力と彈力次第で健者も即時に殺すことも出來る。亦病者を須臾に全治せしめることの出來る一面もあるのである。但し定命を轉ずることは格外の信力と彈力と道力とを要するから一般人には遠く及ばないのであるが。要するに惡安心に重きを置き、惡平等に墮せしめるが如き態度と説明をのみするものは、未だ以て因縁性空を知らず、大慈悲心を有せず、見性了事の人とは許し難いのである。

三、其れが果して菩提心か

不可得の自性を證せば何もない。何もなければ即時に世界は我れに占領出來て居るではないかと、空見識だけは成立する。然し仔細に點檢すれば未だ我が破れてをらね。我の大を妄認して、我の大に安住してをる病人である。是れ三百由旬の境界のみ、孤調解脱の躰形の外道のみ。二乘聲聞の毒酒に酔ふてゐる。野干の身となるとも二乘聲聞の身となる勿れと佛がしばしば痛誡し給ふのである。其れが果して菩提心か。

彼等が菩提心々々と狂々するは似我蜂の業作の如くまた人をして誇大妄想狂者や孤調解脱の病人を作らんとするのみであつて、人をも社會をも見る眼なく、ただ即處に安住せよと狂吼するに過ぎない。彼等の胸中にも彼等の門下にも眞實の宗教は全くない。たゞ徒らに舊公案を無暗に素通りせしめ、舊公案の四五十も素通りすれば、釋迦も達磨もわれと變つた事はない。天堂も地獄もあるものか。

ただ心に苦しむものは地獄で、心に樂しむものは天堂だ、たゞ苦樂を苦樂とせなければ即身

是佛即心是佛、三祇劫滿の修行、百劫修行の道行の如き皆これ方便虛構なりと空ろそぶき、社會が墮落しようが、惡化しようが、人類の煩悶や苦業はそらごと、たわごと、人は人、我は我人の苦惱は三年でも百年でも平氣である。つまらん事を氣にしたり、人の仙氣を我れに病んだりしないで、酒でも飲んで自儘放題に面白く暮さう。それがよいのだと濟まし込んで平氣である連中を以て見性底の人として取扱つて居るから其門下生の如き一人も因果を信ぜず、三寶を信ぜず、上を敬ひ下を憐れむの態度なく、何れもみな我慢と烏臭の小天狗と化し去らざるものは殆んど稀れである。

彼等の世界からは眞實の佛法を信じ眞實の佛法を行じ眞實の佛法を夢にも悟つた人は殆んど一人も見出すことは出來ない。日蓮曰く。禪天魔と。實に彼等の世界は天魔界なるべし。決して佛法界即ち歸依三寶界ではない。斯る邪見をもつて人類社會を破壊する。其れが果して菩提心か。

眞正の佛法はたゞ歸依三寶のみ。隨つて佛法の眞實義はたゞ信受頂戴奉行するにあるのみ。見よ不可得の自性を證せば直に十界の依正宛然として因縁現成することを信徹する。否明了に

見徹する。既に十界我れにある。されば近くは病者を見れば即ち我が病苦である。貧者を見れば即ち我が貧苦である。

湧然として同體の大悲心發せざるを得ない。

是を救はんとすれば富んで且つ健でなければ如何ともすることが出来ぬ。そこで常に自ら身心ともに頑健になるの道を勵み、福德増進のため勤めて陰徳も陽徳も積まずに居れなくなる。また比較的是れを廣く云へば、社會は皆迷妄と苦との巷である。故に無縁の大悲心が發り何としても救はなくては一刻も安穩でない。これを佛性不斷の紅糸線といふのであるが、此大目的をいやが上にも達成せんと欲せば薄福少徳では何としても手がつかぬ。其れで福分を植ゑ、徳相を培養し、衆生縁を増さんとあらゆる修行を積んで其増殖の爲に没頭するのである。佛陀百劫の修行とは實に此事である。だから苟も菩提心即ち度諸衆生心ある者は夢にも不陰徳な行爲は何としても爲し得ない筈である。法性の理即ち無性因果の理を見破した者は絶體に天を怨まず人をもとがめず、たゞ自己の不徳を憎み慚じ且つ恐れて一滴水も反古紙半枚も無駄にはされない。一粒米一莖菜を拈じて醍醐味となし、無邊の陰界の餓鬼にも時々供養し、動物に直面すれば

心密かに汝是畜生發菩提心と念じ、一言半句を人に垂れても斷無や烏臭の恐るべきを説き、三寶を恭敬して罪を懺し、感應を仰ぎ、上を恭ひ下を憐み三寶物の亂費を恐れる等枚擧に違ないである。雪峰は一千五百人の修行者が座下に集つて猛修行して呉れるのは、老僧が若い時に諸方の叢林で苦役を親切に行ふた結果より招來したのだと屢々警告した。永平は杓底の殘水をも大切に取ればはれ、關山は故衣素餐破屋住居の陰徳を積まれた。是等を菩薩の行願成佛國土の大事因縁と稱するのである。今日永平下も關山下も他の諸宗派よりも格外に榮えつゝあるのも皆このためである。永平の宗風を知らんと要せば、大清規と眼藏を拜せば聊か窺へる。永平廣録はたゞ永平の見地の高廣を知るのみで、初心の行者には下手に拜すると天魔に墮する恐がある。若し夫れ眞正の見性者であれば佛も諸佛祖も斯くも陰徳を積むべきことを説き且つ實行された大事が分る筈でなければならぬ。然らざる者は天魔禪の孤調解脫の敗種の輩であらうと云ふ事に氣が付ねばならぬのである。積功累徳しなければ假令多少の見所があつても他を度する道も行はず法孫も決して榮えないものである。因果必然の道理は佛祖も自由にはならぬと云ふ道理を深く信徹して、勤めて因果の理法の大地に因果のルールを敷いて衆生縁を培養

し福分徳分解分等を極力培養せねばならん。

正傳の佛法に參じて多少の眼が明かになつたからとて、何人も直に大菩薩乘の那人になり得たのであると大誤解してはならん。見よ、如來の會座にすら孤調解脱の人非人はウヨ／＼して居つたではないか。後世祖師の席末に參じて大悟大徹と稱するものゝ中にも、孤調解脱輩は限りなくあつた。今や増々此輩が多くなつて來た。支那の古も澤山あつた、日本の古もウヨ／＼して居つた。近來もかゝる人を二三四五輩知つて居る。播州にも一人あつたがこれは十數年前に死なれたとのこと。鎌倉邊にも居られたが兩三年前遷化せられたと聞いてゐる。今一人東北にある。其他は云はぬが華か。右三氏は大悟大徹と稱し師家も印證して居られる様子。彼等は眼は明かでも不徳であるから人師として世に出る事をせない。即ち爐鞴を開いて來機を接する事を一生せないと云ふのである。彼等は流石に一應因果を信じて、自ら知り一生涯教化せないと云ふ主義、この考は一面誠に尊い態度である。此態度には極めて敬服し尊重してゐる。されどただ一生の培徳位では出鄺教化の徳は積めまいから、此一生は隱退して聖胎長養に努力せられるのであれば、一面ではなくて全々敬服し、尊敬して止まないものであるが、實は穩退は穩

退であるけれども、其の穩退の行履を見るに具体的に云ふに忍びないが、陰徳の培養ではなく、全く福德縁の破壊の仕放題と云ふ態度である。されば彼等は長く正師に參じて、法眼廓開であると師も評し自らも許してゐても其實は真正の大乗禪即ち菩薩道に入ること能はず、二乗聲聞の敗種禪即ち孤調解脱の域を脱することが出來ないのである。

更に右播州邊に居られた一人は實に天魔禪にまで墮落して居つたらしい。現代も此等の漢が中々ある。況んや眼睛廓開しながらも天魔禪に參じて、知らず識らず自らは天魔禪に墮し、他の門下をして天魔狂とし烏臭奴とし大我慢輩となしつゝあることに氣付かない。斯る病者のあることを恐れ且つくれ／＼も注意しなければならぬ。

佛法は十年二十年位たゞ向上の宗旨を提唱し、舊公案を素通りの見たからとて決して／＼手に入るものでは斷じてないと云ふ深甚の道理を深く自覺自省せねばならぬ。其様な簡單なことで正法が信じ得られ、諦らめ得られるのであれば誠に結構なことであるが、如來の會下、祖師の輪下にすら孤調輩天魔奴がウヨ／＼出來たではないか。永平深く是れを憂へ給ふた、是れが我宗向上の眞風である。依つて永平が禪宗の稱を戒め給ふたのも此處にあるわけである。

佛祖に代つて演法度生せんとせばお人好では出来ぬ。況んや天魔奴的態度では猶更可愼の後世家を誤ることを恐惶せねばならんわけである。然らざれば其が果して菩提心であるかをつくづく深察すべきである。

葛は恨み尾花は招く夕暮に心強くも過ぐる秋風
年ごとに吹くや吉野の山櫻木を割りて見よ花のあかりを
故里と定むる方の無きときはいづくに行くも家路なりけり
盛りをば見る人多し散る花のあとを見るこそなさけなりけれ

四、其れが果して參禪學道か

參禪學道は一生の大事なりゆるがせに爲すべからずと永平の學道用心集にある。一生とは五十年の生命期間を云ふのではない。盡未來際佛果を超證するまでの事である。換言せば人生の大目的は唯一あるのみ、その唯一の目的とは成佛道即ち人格の絶對完成にあるのである。其の大目的を達成するには參禪學道の唯一道あるのみである。而して參禪學道に缺くべからざる二つの方法がある。曰く、「或從經卷」と「或從知識」とである。此の兩者は全く鳥の兩翼車の兩輪に似て一を廢すれば他の一つも全く成立せないやうなもので、或從知識と或從經卷の何れの一つを缺いても斷じて正しき信念も正しき見道も得られるものではないのである。而して其の或從經卷とは佛敎の理を正しく理解した佛敎學者に就て佛敎教理を研究することであり、その或從知識とは佛祖の身心を大悟徹底した宗敎家に就いて親しく其の指示の下に坐禪辨道することである。が無論佛祖の身心を明め大菩提心あり、且つ佛敎教理即ち法性の道理即ち吾人の本質の性能を能く了解した師であれば、別に敢て教理の研究をせねばならんものでもない。けれども實

は一人にして教理の研究にも堪能であり、且つ宗眼圓明の師に會ふことは難中至難であるから、右別々に示されたのであるが、また一には右兩方完全の師があつても、同時に參禪も研究すると云ふ事は、所謂二鬼を追ふものは一鬼を得ずで、兩者とも徹底的に行ふ事が出来なから完全に研究し、完全に修行せんと欲せば別々に是非修めねばならぬのである。但し兩者とも完全を期するのでなければ一師に就いて兩者を併修するも差支ない。また兩者の内何れかに重きを置き、他は要領丈けで好いと云ふ考なれば、一師に一時に併修することも出来る。何れにしても經卷と知識の兩者に就いて修めるのでなければ、十中八九と云ひたいが、實は十人が十人とも正法を信解し悟人するものがない。一方のみ修めた人は皆な悉く邪路邪見に墮して仕舞ふのである。人或は云はん知識に參禪しつゝ碧巖錄、從容錄、無門關、正法眼藏等を聞くのであるから、茲に自ら或從經卷があるのではないか、況んや宗師家の時々口宣は直に經卷ではないかと。曰く宗師家で經卷にも明かな見地を持つて居られる人は實に稀である。稀であるから一時の心得としては口宣も無論結構である。けれども法性萬差、機類千萬なる道理を教へて頂けるわけのものではない。また碧巖錄や從容錄等の語録は法性萬差の理路を教へた

ものではないから、是等の語録を拜覽しても其の道理は分るものではない。況んや語録等の向
上の法門は大悟大徹の眼識を有せざるものには決して分るものでない。分明したと思ふても皆
上すべりである。語録の上よりは悉く惡平等斷無の邪見に墮するものである。要するに例へば
或從經卷は龍を畫がき佛像を作るやうなもので、參禪と語録の研究は點睛するやうなものであ
る。點睛しない佛像や龍は全く死物であつて、或從經卷の知識理解なくして強いて點睛せんと
すれば目玉ばかりのお化けが出来上ると一般で、佛教々理の理解即ち自己の本質の性能、機類
萬差の道理自己の機熟の程度佛祖深甚の妙境界、見思、塵砂、無明の縛脱の様子、方便眞實の
設法の妙用等、所謂教、解、信、行、證、入理、などに一應理解と信受のあるものでないと、
十牛圖のたとへで云ふて見れば提唱等を無暗にただ聞くと、我れに本質の心牛ある（此事ある
事を信ずる）ことを聞いて、釋迦何人ぞ吾何人ぞ他人の鼻を借つて呼吸せない、人々此何をか
缺少せん。悟りも何も用不着と濟し込む病人が現代は大部分である。更に一兩年聊か打坐をな
して些子相似の牛影を瞥見して大悟了畢と誤解して、烏臭を振り廻すを以て能事とし邪見を
妄説して自他を毒海に墮落せしめざるもの現代果して幾人かある。世の識者をして禪を嫌はし

めるのは彼等のためである。

更に相似の些子證を得たるものに舊公案を素透りせしめて大事了畢の印證を與へ、師も弟子も共に満足して、悟道の卒業生と思ひ更に法の聞くべきを聞かず道の修むべきを修せず、ただ茶や花や酒や筆墨裡に隱居して、世の中の火より強烈なる毒境に苦んでゐるものを、雲煙過眼視し、高見の見物をして平然としてゐるものは未だ人生の目的も解せず、參禪學道らしき參禪學道をなさなかつたから、知らず識らずの間に皆邪路に陥つて仕舞ふのである。それが果して參禪學道であらうか。其の罪學人に少く師家に多いのである。

近來諸所の道場にて十年五才、打坐に看話に親しく參學してゐる出家在家の禪士禪姉等と膝突合せていつはり無き處を問ふて見れば直に分明する。本具佛性を信ずるものありや。生死去來を信ずるものありや、因果必然を信ずるものありや、成佛過程を信ずるものありや、諸佛實を信ずるものありや、少なくとも這個の五ヶ條位は信ずる者でなければ、此事ある事を信じないのでない、此事あることを信じた上でなければ、佛祖道の參禪では斷じてない。一種の靜坐か外道の邪禪である。現に大事了畢を以つて任じてゐる連中に禪は膽力養成術である。と稱し

て得々たるものもある。

彼等の參禪其が果して參禪學道か。

要は只三種の三寶即一の道を信解して打坐を勤むるにあるのみ、然らざれば生死透脱は全然出来る筈がない。謹んで參禪學道の高流に申す、正しき或從經卷と正しき或從知識に依つて正解、正信、正修、正智、正見を得て自他を兼濟して下さい。

眞正の佛日は今や西山に入らんとする秋、最勝の善身を徒にせず、今日已後盡未來際般若の正縁を持續し而して共に佛道を成ぜん事を。

澄潭の月影、靜夜の鐘聲、叩擊に因つて動ぜず、波瀾に觸れて散ぜざるも、尙ほ是れ生死巖頭の事

五、僧寶の使命

二八

高祖大師大衆に示して曰く「西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり」と。されば世尊見明星悟道の境界も、一代五十年の説法も、歸依三寶の外には何物もないのである。従つて歴代祖師の宗旨も全く此の内にあつて自由應化せられたのである。而して三寶に一體三寶、現前三寶、住持三寶の三種の徳あつて、一たび歸依する時三種の實徳、即時に圓成すると、高祖大師の教授戒文にある。是の如く信徹し、是の如く證得するのが我が宗正傳の佛旨である。是れを小柄は最高の哲學最深の倫理最實の宗教と云ふ所以であります。

されば吾人諸佛子たる者は、身の出家在家を問はず、其の平等法の理の上からは、一體三寶の吾が身であり、現前三寶の吾が身であり、住持三寶の吾身である。自らも愛せざらんや、自らも敬はざらんや。其の差別人の事の上からは、諸佛子は三種の三寶とも佛寶たる事は遠慮せねばならん。また法寶ではないことも明了であつて、諸佛子は正しく是れ僧寶である。だが平等即差別であるから、勿體なくも三種の三寶即一の僧寶の吾れであり、差別即平等であるか

ら、恭けなくも僧寶即三種の三寶即一の吾れである。畢竟如何が道破せん。此の意旨に於て吾人佛子は正しく是れ僧寶であり、獨坐大雄峯の僧寶である。赤兒如來であり、佛子である。

法界を腹にをさめて佛子哉

法界も忘れて我は佛子かな

忘れるも忘れて今は佛子哉

僧寶の大尊貴生なること實に是の如し、豈に感泣せざらんや。豈に踊躍せざらんや。然れども此に亦無中道ありて平等の方面からは出家在家を問はず、男女老少に論なく、悟未悟に拘らず、修未修を選ばず等しく是れ大尊貴生なる僧寶であるけれども、差別の方面からは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の次第階級あつて一混することを得ないのであるといふことも明かに知つて置かねばならん。が差別即平等であるから何人も自屈してはならん。平等即差別であるから又何人も自高してはならぬのである。自高せず自屈せず、こゝに上下前後、縑素、男女ひとしく水乳和合の大僧徳を發揚し得る。兎角、生悟りの弊は平等法あることを知つて差別法を忘れ、また凡庸者流の弊は差別法なることを知つて平等法を無視せんとする。平等差別何れに偏

二九

しても斷じて佛法ではない。邪見であり凡見である。

而して僧寶とは梵語に、僧伽耶と稱するその略稱で、僧伽耶とは何人を問はず、佛子の總稱であつて和合を義とする。故に僧團即ち佛弟子仲間のことを和合衆とも云ふのである。和合は直に天地自然の大道であつて、佛法甚深の妙旨の要領である。和合の外に漏れる道は全くない。若しありとすれば、それは凡夫の迷執であるか、外道の狂觀である。その迷執と狂觀より起る動作は、實は本具の佛性が無上道に至らんとして、まだ自性の性能に目醉めない間の盲目的衝動である。這箇の佛性一切の生物となつて盲目的に生きんとするもだえとなつてをるのである。此の盲目的の妄動を覺破し、圓融和合の實徳に還らしめんとするのが佛法の教化であり、諸佛子僧の行願である。覺破一轉せば即時に和合の眞徳に歸家穩坐する。されば此の道理を信解するのが諸佛子の安心起行の第一歩であり、是れを實行するのが第二歩であり、是れを大悟大徹するのが第三歩であり、是れを消融忘了するのが第四歩であり、是れを一切衆生をして亦吾が如く信解行證せしむるのが第五歩である。但し一步と乃至五歩とは、一でもなく異でもない。一即五、五即一の萬里一條鐵、諸佛子たるもの須く分に應じて、自求菩提教化衆生せねばなら

ん。此の行願の起因は決して接木の様なものではない。人々本具の和合の性徳より發揚顯動するのである。その和合の性能を光揚せんと要せば、三歸即入の無我相より得られるのである。無我相の廣大心の存するところ、喜悅の心も、慈悲の心も自ら發揚せずにはをらん。這箇大心喜心慈心の三心のあるところ必ず和合僧あり、和合僧のあるところ必ず三心現前する。

然るに如來滅後中古より此方、僧寶を以て僧侶の異稱であるかの如く一般より誤解せられ、在家の佛子は僧寶でないのと思ひ、佛法を以て僧侶の專有品の如く考へられて來た。非常なる誤謬である。

佛弟子は皆僧寶即ち和合衆であり、また佛法は決して僧侶の專有物ではない。一切衆生の生命であり諸佛子の大師寶である。但し出家と在家の差は、専門と専門でないとの純雜の差はある、無論現代の出家人の生活ぶりを以て傳道求法の純粹生活だとは斷じて云ふのではない。今の僧侶は實に墮落の極に達して居る。全く佛法は出家の男女と在家の男女の四衆等分の所有の寶である。

然るに中古已來佛法は僧侶の專有物であつて在家の吾等の與り知る所でない。其の盛衰存亡

は僧侶が全責任を負ふべきものであるとし、佛法は國家社會に必要缺くべからざる大道であることを深く信ずるものも僧侶の傳道求法に一任して、在家の僧衆即ち佛子たるものは一向に求法もせず傳道もなさず、僧侶が傳道せない求法せないと云ふことを時々聞かされる。が小柄は其の言に伏することは出来ぬ。出家の吾等僧衆もナマケて居るから申譯がないが、僧侶、もナマケて居るから困ると云はれるのなれば小柄も御もつとも至極全く申譯がないと云ふのではあるが、僧侶がでは伏することが出来ぬ。僧侶も、でなければならぬ。

斯る「も」と「か」との相違位と如何にも小理窟を並べるかの如く聞えるか知らないが、さうでない。こゝに實に重大なる責任觀念の起るか起らぬかの分岐點であるから在家の僧衆も全く令法久住の重任の一半は負はねばならない責任もあり權務もあるのだと云ふことに明かに目醒めて、消極的にも積極的にも、在家の佛子も嚴護法城の重任の一半を負ふてもらはねば心ある僧侶が如何にあせつてもどうすることも出来ぬ。天地間の事は皆持ちつ持たれつ、即ち協同和合の上でなければ何事も出来ぬ。

然れば在家の僧衆は如何にして嚴護法城の重任を果すか。曰く消極的には不都合なる僧侶は

全く立つことの出来ない程にするのが第一である。信念の研究もせず修行もせず、布教もせない僧侶はドシ／＼放逐することである。積極的には自ら求法傳道する。物質の援助をする。信念あり、修證あり、傳道の志ある僧侶を活用するが如きことなどを云ふのである。決して自己満足で済し込んでならぬ。大乘の禪風を信ずるものは極めて積極的でなければならぬ。衆生無邊誓願度の佛心佛旗を振り立てて出家在家の菩薩一團となつて、傳道と求法に従事せねばなりません。

佛滅二三百年来にして僧侶は求法のみ没頭して、傳道の大事を忘れた。そこで在家の佛子が驟然として立つて求法とともに傳道に骨折つたから衰亡になん／＼として居つた佛法も再び光輝を放つやうになつた。然るに支那に佛法が入つて七八百年にしてまた僧侶のみの佛法となつてしまつた。

僧侶のみの佛法となると佛法はどこでもいつでも衰微してをる。また我朝も欽明用明の朝より佛法が入つて、出家在家和合の佛法となつて隆盛を極めたが、是また小一千年にして追々出家のみの佛法となつて衰へ始めて方今倍々出家佛法となつて、佛法地を拂ひかけてをる。

此の際、此の秋、我が同信同行の者は愈々ここに自覺して教界の木鐸となり、先覺者となつて自利利他將來を完ふしたいと希ふのである。然らざれば自己の今世後世を如何にする。國家社會の現在を如何にする。

然るに禪の聞きそこない、説きそこないの結果、由來我が禪門の僧團には二つの大なる弊があつた。その一は傳道求法とも協同一致即ち和合して事に當る事の出來ない病氣。その二は差少の信解證入を得れば一人好がりとなつて引込んでしまつて、積極的に傳道誘引するの心懸けが起らない。前者は無我であるべき佛法を聞きながら、却つて我見の暗窟に陥つた結果であらう。後者は傳道の爲めの求法者であるべき大乘佛法を聞きながら、却つて引込主義、個人主義の凡夫二乗の魔境に墮落したのである。斯る結果はせめて死佛法と云ひたいが、實は凡夫外道の邪見であつて決して佛法ではないと云はねばならん。我が眞の僧團の精神はどこ〜までも協同和合の動作と消極的信修を練磨しつゝ、不惜身命大積極的に傳道に従事せねばならぬのである。但し消極的積極的と云ふても決して二種の法があるのではない。要は退いて信修を練磨するのも、ただ三寶を信じて打坐を勤めるばかり、進んで傳道弘法するにもただ三寶を信ぜしめ

打坐を勤めしむるにあるのみ。要するに修證義と坐禪儀の二卷さへあれば好いのである。否修證義一卷で好い坐禪儀一卷で好い、けれども、眼光紙背を照す力がなければ修證義に坐禪を見出し、坐禪儀に修證を見出すことが容易でないから、自他の信修の標的として右の兩鏡を以て照鑑するを要するのである。明々に照鑑し來れば兩鏡は元來一鏡であることを了知し得る。我が親愛なる道友諸氏よ、出家在家を問はず、我が道友諸氏を除いて、正傳の佛の正法を信解し得るものは殆んどあるまい。決して學問や地位や巧説に欺惑されてはなりません。我國でも既に佛法は地を拂つてをる。況や他の諸外國をや。噫、正法地を拂へば世界は暗黒である。既墜の正法を眞に挽回せんとするものは誰れぞ。誰れの任ぞ。

物不受變則不成器 人不涉難則不知道

六、殺人刀活人劍

三六

菩薩は戰士であり、勝友とは戦友である。戦を忌避するものは死物である。活物はいつでもどこでも誰れでも戦をしてをる。戦の方法策戦の手段、敵の目標は時々刻々に更なる場合もあるけれども、戦をせない時所はない。戦を捨つれば進歩も向上も平和も何も彼も得られるものではない。然れば戦を忌避するものは必ず自信なきものか、意氣地なきものか、退嬰主義者か、魂不徹底の死人か、所謂の世渡上手か、狡猾漢か、亡國民か、個人主義者かであつて、何れにしても己我愛に捕はれ、大法を顧みざる凡愚の迷執よりするのであつて、決して碌なものでない。

古聖曰く「太平元より將軍致す、許さず將軍の太平を見ることを」と。禪門に殺人刀と活人劍の二振りの刀が常に具へてある。獨り殺劍ばかりでない。活劍も是れ刀である。殺活別であつても、ともに是れ刀である。刀は是れ戦の用具であつて、太平も争鬪も刀の賜、戦鬪の所産でなくて何である。されば戦鬪を忌避して太平を要望するは、全く地球を手土産に火星を訪づれない。

んとするよりも困難である。いや絶對に不可能事であらねばならん。たゞ戦のない世界は唯佛與佛の世界にのみ可能である。がその唯佛與佛界は決して天から降つてくるのでも地から湧いて出るのでもない。吾人戰士が三祇百大劫の間、悪戦苦鬪した結果の招來境であつて、決して一生兩生位の短期戦で會領し得る小世界でない。無論云ふまでもなく、一時間戦へば必ず一時間だけの平和境は得られる。一日戦へば一日丈、一年苦鬪すれば一年分、十年五歲戦へば十年五歲大の會領地は得られることは因果必然秋毫疑を容れる餘地はないが、徹底滅三毒出三界と宇宙を征伏することは、一生兩生の短期戦では絶對に會有し得らるゝものではない。

最も必ずしも人間の頭で作つた長短の時間ばかりにかゝはつてはならないけれども、人間の行程を定めるには、人間の作つた時間も相當に參考にして行かねばならん道理がある。人によつては刹那にして一躍三祇劫を突破する事も出來得る道理もあり、實人もあるけれども、かゝる人は千萬億兆人中に一個半個も見出し難い。但し何人もその可能性は完全に所持してをるけれどもその可能性を一時に完全に發揮することは實に容易でない。己我の執性が濃厚であるから。

然るに淺學妄聞の禪學者が往々に一超直人如來地、即心成佛、直下承當等の語を早や呑み込みして、一年兩歲、或は十年五歳の修證にして完全に唯佛與佛界に至り得るのである。三祇百大劫の論などは佛意の淺見と、己我の迷執深きものみの修行であるとするものあり。甚だしきに至つては、一坐の功も積まないで衆生本來佛であると信ずれば其れで好い、修行などして何を求むるのだ。求心止む時全體現ず、誰れか是れ唯佛與佛にあらざると主張する白盲漢が大部分であるが、前者は法性の理の一部を相似に悟るには悟つたが、正師に參ぜざるより來る大妄想であり、後者は斷片的に禪書を見て獨斷的に早や呑み込みしたので、共に大誤謬の妄見である。見よ何れの處にか天然の彌勒自然成の釋迦がある。何れも千古多劫を経て惡戰苦闘の結果成就し給へる佛陀ではないか、吐。

最も前者の論も後者の論も一往は御最も千萬、佛祖も屢々かく説きかく諭してをられる。何人も其の可能性を完全に具へてるのであると云ふ事を深く信解すべし。佛法の一面觀としては是れを深く法を信ずるとも、深く法を悟るとも云ふのである。がたゞ是れ丈信悟して濟して居る者を擔板漢、天魔禪、盲目禪、無事坑裡の死人禪等と下げしめねばならぬのである。かゝる意識は惡

平等の邪見であるからである。佛法若し是の如くにして止めば今日まで傳はるものでは斷じてない。是れを眞宗流の言葉で與へて云へは「法の深信」を得たと云ふので、即ち衆生本來成佛を信解すと雖も、無始劫來の無明迷醉の事實を忘却してをるのであつて「機の深信」なきものである。譬へば天上の月を貪り見て、脚下無底の陷阱に臨んでをることを忘れてをるのである。則ち多少の見惑は概念的に、或は實證的に伏し得たりとするも、なほ是れ思惑深重の吾れである事實を忘れて居るのである。故に古聖先哲は二三十年の猛修行に依つて大悟徹底見惑を斷破して了つてから更に十年二十年乃至四五十年間火の出る様な猛修行をなされたのであるが、徹底大悟の後四五十年間の猛鍛鍊位で決して猶満足せられたのではない。満足するのではないけれども止むに止まれぬ衆生教化の大悲心に催されて未成品ながらも出世傳道せられたまでである。實を以つて云はば大悟徹底して始めて修行らしき修行の第一歩に入り得たのである。何となれば悟らなければ自性の何物たるやも分らず、煩惱の何物たるやも分らない。大悟大徹して始めて敵（煩惱）の性能と身方（自性）の性能も分明する。分明するから戰爭の仕方も籠城の心得も手に入り、戰に必勝を期することも始めて出来るのであるから。

未だ大悟大徹せざる彼の無事禪者流や公案數連中の如き一人残らず盡く敵を認て身方としてをるのである。彼等は生死の本源なる妄識を妄認して却つて、解脱の境となし、不安懊惱の基潮を執して錯つて安心の世界を得たりとして居るのである。換言すれば敵を錯つて身方とし勝ちほこりながら却つて敵陣に捕虜となつてをることを知らないのである。見よある一派の所謂佛陀々々とは是れ何物ぞ。全然あり得べからざる宇宙的大我を妄認夢想してをる。無明迷執ではないか。小乗教で既に排斥し了つてある我大蘊小の妄見であつて、佛敎では絶待にない。佛敎は絶對無我敎である。佛敎では小我と大根、否大我とを問はず、我が存在は絶對に許さないのである。然るにかゝる妄執の見より妄認した佛陀なれば、佛の一字も全く心田の汚れだ。彼等の佛陀は全く佛法の蕙魔である。その佛陀を一刀兩斷粉碎し來つて始めて小分の佛法に契ふことが出来るのである。

是の如く吾人には無始劫來物質魔、唯心魔、哲學魔、宗教魔、名譽魔、友人魔、教師魔、病弱魔、健康魔、性魔、怠慢魔、信仰魔、慈悲魔、悟道魔等の大魔王があつて各百千の眷屬を引き具して變幻出沒窮りなく、一切の人類へ分けては行者の心中に突入同化して、他國の塵

境、生死の冥途に陥れんとするのであるから、吾人佛法の戰士は戰友相誡め水も滴さず、息もつかせぬ戰鬪を續けねばならなのである。この戰爭は内凡位（佛法を信ずる凡夫）の第一歩に初まり、三賢十聖位を経て等覺の金剛定を突破するまで連戰連鬪をするのである。即ち五十二城奪回の戰爭が開始せられるのである。是れを無階級即階級、階級即無階級とも、因果不二とも、不二の因果とも云ふのである。

現代も大悟徹底の那人は二三あるべし。されど大悟上の内凡位で小休みして満足してをる人のみであると思ふ。然るに一般の門外漢は其の小休みの態度を以て小休みであると云ふことを知らず、大悟底人の活三昧は斯くあるものなるべしと誤解せざるもの果して幾人かある。是れ禪弊論の起る所以であらねばならん。決して佛法は放懶無耻を是認するものではない。たとへ大悟底と雖も小根劣機のもの、一生の修證には三百由旬（精神生活の確立だけ）即ち心地開明丈で一時満足する。精神生活の確立だけで小休みするも流石に大悟底の人は見地に間違はないから、其れで好いのだとは思はない、眞の修行は是れからであると云ふ道理は分明してゐる。分明はしても小根薄福の爲めに一生では努力を繼續し得ないばかりである。即ち大悟底の凡夫で

一時小休みするのみ。五十二位の階級、否百千萬億の階級は一と休みの後徐々として進撃進戦するのである。だから兜率の悦禪師も道ふて居る。「撥草參玄は唯見性を計る」と。洞山大師は「佛向上の大事を明めて初めて話の分あり」と。見性徹底して始めて佛法の話も分り、修行らしき修行も出来初めるのであるぞとの意旨である。

然るに佛教の教理を知らないで、無暗に祖師の古則公案を説聽する連中は、此間の眞消息を知るもの實に稀である。大概斷見か常見かに墮して向上の一路を知らず漫りに禪道佛法は一種の膽力養成法位にしか思はず、空腹高心以て佛祖を捉敗する底の那人だと氣取らざるもの果して幾人ぞ。

依つて既に諸佛諸聖の軍國に入れる吾人戰士は身の出家在家と、男女老少と悟未悟に拘らず、退いては自己の妄惑界に向つて善戦を連續するとともに、進んでは諸佛の正法を破壊する天魔外道の頂寧巢窟に向つて突撃粉碎を決行せねばなりませんのです。是れを上求菩提下化衆生と稱するのであつて、吾等僧團とは即ち法界の戰士の軍團の意であります。されば戦争眼を開いて見れば佛法は唯戦闘を教へたものである。戦闘を除いて佛法はない。但し戦争の爲の戦争で

はなくて、平和の爲の戦争であると云ふ事を忘れてはなりません。眞の平和のための戦争です、安居は必ず殺すべし、故に古聖も殺し盡して始めて安居と云ふてをられる。眞の海晏河清は眞の戦闘より招來するのである。

但し戦争は凶事實剣は凶器であるから他に向つては無暗に抜いて振廻されては困る。抜くに時あり振廻すに所がある、が既に時所位を見計つて抜いた以上、振廻し始めた已上徹底的に殺し盡さねばならん。蛇の生殺しでは却つて後日の禍となる。吾人勝友同信は五濁惡世の現代としては勝友の中の勝友戰士の中の大戰士であるから、百人二百人の數決して少しとせない。現代のヒヨロ／＼魔軍を突破すること恐らく一騎當萬なるべし。一騎一切破なるべし。何となれば魔軍の連中には何等確固たる根據はない。たゞ日進月歩の科學の一部と、常識の泡影に棲息してゐる浮遊である。吾人戰士は歸依三寶の金剛寶城に依つて、衆生無邊誓願度の御旗印を推したて、無限の廓然無聖の眞空彈を有するのであるから。但し眞空彈ばかりでは彼等魔軍は其の絶待必滅彈なる眞空彈に打たれて死了壞滅して居ながら、なほ打たれたれることも知らずして、其の亡靈がガヤ／＼云ふものも多々あるから飽くまでも眞空妙有の機關砲を以て徹底掃蕩しな

ければならぬのである。

小生常に道ふ。今や日本にも佛法はない。況んや世界をや。而して佛日一滅すれば世界は暗黒である。魔説を魔説なりと明歴々に宣告しても、一般社會も僧侶までが何れか是れ正、何れか是れ邪の判断にすら苦しみ抜いて居る始末を見ても、如何に佛法の既に無き事が知られるのである。今や我國にも佛法らしき佛法はドコかの片すみに明滅の間に殘照を見るのみであるが、彼の世界的の大宗教である靈智教會では數年ならずして、釋尊の佛法の後繼者なる彌勒世尊が出現すると云はれて居つた。是れを小生は信じたくないが一切の事情を察すると信ぜざるを得ない。全く數年ならずして彌勒佛は出現ましますべしと思ふ。何となれば彌勒は釋尊の遺囑を受けて、釋尊の佛法地を拂ふたら出現して呉れとの遺囑であるから、年代としては釋尊滅後五十六億七千萬歳の後と云ふ事になつて居るけれども、斯る數字には用はあるまい。要は佛法地を拂ふたら出現すると云ふ約束である。而して世界中は今や全く真理の所在、人生の燈明を失ふて十人十種、萬人萬種の勝手次第なことを吼へ立てて學者も宗教家も途方に暮れてゐるのであるから、一般の有象無象連中は猶更何が何やらサツパリ分らず、結局強いもの勝ち、個人主

義、事勿れ主義になつてしまつて眞の宗教の權威は全くなく、教育者も政治家も一般人もたゞ己ある事を知つて他を顧みず、佛教僧侶而も宗教教育の大綱を握れる地位にあるものまでが、佛陀先聖の教にも全然隨はず、却つて一二世紀前より漸く開拓し始めた幼稚極まる科學、而もその幼稚極まる科學の一部と常識判断の淺劣なる頭腦に照し見て、其れで承認できぬ程度の教へはたとへ佛陀先聖の教も一言の下に迷信なり、取るに足らずとして捨て、顧みざる時代である。斯る淺妄無謀の舉に出でても佛教僧侶までが誰も怪しまないで、却つて進歩した頭であると思つてを有様である。是れを不都合であり妄想であると覺醒せしめんとすれば、一般僧侶までが却つて是れを怪しむと云ふ惡時勢である。正法の權威、正法の光明も全く透らざる最も恐るべき五濁の惡時勢であるから彌勒の御出世説も眞なるべしと信ぜざるを得ないではないか彌勒の御出現は釋尊の佛法印ち眞理の太陽全く地平線下に入らねば出現せざる約束であれば、彌勒の出世説は釋尊の佛法即ち正法全く地を拂つた事を反證するのであるから、この意味に於て彌勒の出世説は痛恨極りないのである。小生は又此の意味に於て彌勒如來御出現遊ばすと信ずるのである。されば一面痛恨と同時に一面彌勒佛出現遊ばすとすれば、積年の暗黒界も一朝

にして赫照圓明の世界となるのであるから歡喜踊躍して一刻萬秋の思ひをなしつつお待してゐるのである。だが只拱手してお待するのは全く道でない。内外の諸魔と惡戰苦闘しつつお待ちするのが眞にお待する正道であらねばならん。

云ふこと勿れ彌勒は汝が脚下にあり、他に向つて求むる勿れ、回光返照退歩承當せよ、彌勒は汝が鼻孔上に現すと。然りその一面の眞理は禪書の一ページも拜覽した者は誰れか是れを疑はん。然れども斯る一面の言一面の理に捕はれて、却つて先聖を無視し、先達を愚弄する駄法螺説のために正法地を拂つたのである。實は早く正法地を拂つたのは惡禪僧の駄法螺の惡影響も大いにあるのだ。見よ、先達の直指なくして誰れか成道正覺し得るものやある。然るに斯る一面觀の空法螺を亂吹するのが禪弊の第二といふものだ。

また試みに深く觀察せよ、活眼睛丈は具へた宗師も今なほ一箇半箇はある。されど其の師は未だ大菩提心も不足、擇法眼も不足の爲に、その師の輪下に參すること十年五歳、古則公案もともかく幾百透つたと云ふものを見るに、その多くは正傳の禪を以て一種の膽力養成術であるかの如く解するか、一種の高尙なる精神的遊戯品視するものばかりで、生死去來を説かず信ぜず、

因果必然を説かず信ぜず、諸佛の實在を信ぜず云はず、吾人も成佛の過程にあると云ふ道理も信ぜず云はず、諸佛と吾人と常に感應道交の行はれてをること云はず信ぜず、況んや自我の迷執の如何に深きかを全く云はず信ぜず、たゞ大法螺を徒に吹くものばかりではないか。況んや其の他の似非なる師の下にある連中をやである。彼等は正傳の禪家に巢くつた惡魔外道の禪となつてしまつたのである。

而して一昨年より彌勒は既に出現せりと靈智教會では云ふてをる。その彌勒佛とは先年今武平氏によつて翻譯せられた「阿羅漢道」の著者クリスナムリテー氏である。今や歐と米と印度の三ヶ所に往來して大運動、大説法を試みて居られるとのことであるが、小生は未だ委しい事を聞かないから如來か菩薩か阿羅漢か保證はにわかには出來ないが、何れにしても如何に我が佛法界に正法が無くなつたかと云ふ事を警告し自省して我が勝友否戰友諸同仁の憤起を促し、互様に正法興隆のために自重して、正法界の強敵退散の軍事に従事するの聖業に倍々御盡瘁をお願ひする次第であります。

要するに印度に於ても、支那に於ても、我國に於ても法戰が盛んであつた。法戰が盛んであれ

ば正邪黑白が明かになる。明かになるから正法が榮える。現代人の如き何事にも事勿れ主義、無責任主義、世渡り上手主義、即ち菩提心がなくなつては正法の榮え様はない。依つて我が宗門には告朔の氣羊として猶法戦式が残つてをるではないか。永嘉大師も法戦が無くなれば修行者は皆斷常の坑に墜つるぞと誡しめてある。昔、清涼殿上天子の御前で各宗の大宗論があつた。大燈國師が最後の大勝利者となつて各宗の諸大徳はみな大燈の弟子となつたと元亨釋書にも出てゐる。當時大燈の語として、乾坤打破の時如何、八角の磨盤空裏に走ると止めを刺したとある。

終りに臨んで更に一言法戦を忌避する漢には佛正法はない。邪見か、狡猾漢のみ。信ぜずんば不動明王の姿を見よ。

七、禪 風 大 觀

如來在世にはただ坐禪ばかりだ。提唱もなく、講釋もない。平生の行持が即ち修行の全體であつた。朝起きて坐禪をなし、作務をなし其れから托鉢して食を貰ひ歸つて食を喫し、午後は如來の説法を聞くものは聞く、如來は之を教示せられたのである。當時は日中一食であるから朝食も藥石もなかつた。夜は坐禪を専らとしたのである。之が當時修行の全部であつた。

要するに佛法は勿論學究ではない。唯一の大解脱道を信じて發心し出家した以上はただ早く解脱道を行じ解脱するにあるのみ、生死透脱以外に何物もない。如來に御尋ねして唯坐禪するあるのみで、其が如來在世の佛法であつた。其れで完全であるけれども現今では師學共に信力修行力も十分でなく、志も十分でないから提唱や講釋などするのである。

如來在世の佛法はたゞ坐禪の要訣を聽いて坐るのが全部であつた。其坐禪は只管打坐であつて、貪瞋痴の三毒の強烈なるものには、方便道として初心のものには數息や隨息等の觀法を用ひ、また因緣觀、無常觀、慈悲觀等の觀法も用ひられたのである。其から支那に來つて達磨以

來第十祖雲岩、洞山あたり迄は變つたことはなかつたらしい。然るに宋代の初めより多少づゝ
 看話禪が起つて來たが、然し青原下は只管打坐で今日に至つてをるから、大體話頭を看ないの
 であるけれども全くないといふのではない。また南岳下も圓悟迄は大して話頭を看なかつたの
 であるが、大惠に至つて看話禪が大に勃興した。其後南岳下殊に臨濟系では坐禪と云へば話頭
 を看る。話頭を看なければ坐禪でない様になつた。

永平は兩方の長短を見られたが、特に當時の話頭禪の弊害を知り、其弊を示されたけれども
 二代禪師は「一毫衆穴を穿つ」と云ふ話頭を見て允可を得られたのである。太祖大師は只管打
 坐を主とし、話頭禪を伴とせられた（用心記等を見れば分る）其後臨濟宗が盛になるに従つ
 て我宗も其の影響を受けて話頭を主とするものと只管打坐を主とするものと兩方のが出來て區
 別が判然せない様になつた。

されば洞上の宗風は與へて云ふと尙古主義で原始佛法を主とする純粹禪であるに對し、臨濟
 の禪風は尙古の反對の隨緣主義で時處位に應ずる方便禪になつた。奪つて云へば洞上は頑固主
 義であつて、臨濟は墮落主義である。是が兩者の大要である。

然し今禪の本當の立場から批判すると洞上臨濟共に、只管を語らないでもなく、また共に話
 頭を守るでもない。永平の「空手還郷」の通り何物もないのが眞個の佛法である。何物もな
 いから何にも應ずる。是が只管であり、看話である。永平には只管すらもなかつた。佛法の這
 裡に只管打坐などもない、何もないのが本當であるから其の時處位に應じて只管、公案、數息、
 念佛、題目、讀經、作務、棒喝、死公案、活公案等と適時に適法を突き出して殺活自在に教化
 するのである。孤峰頂上には何物もなく手打拂つて赤裸々なる佛法である。赤裸々であるから
 時に只管時に看話、横拈縦用自由自在なるが眞實の佛法である。佛法を信ずるものは宜しく良
 くかく認識すべきである。

故に青原下の宗風と南岳下の宗風は共に是れ無上道であつて斷じて長短はないが、時所位に
 依つて長短はある。各其長所を採つて使つて居つたが大惠に至つて宏智と相對して大に筆戰を
 なし、共に他の短處を論じた。然し内心に於ては互に相許して其道交は實に親密であつた。が暗
 に只管の弊、看話の弊に學者をして陥らない様に氣をつけたのである。親切なものではないか。
 今や曹洞は只管に執して盲目禪屁理窟禪に墮ちて全く佛法地を拂つた。臨濟は看話の相似禪、

似非禪に墮して竟に天魔禪に墮しつゝあるのは何よりの哀しき證據である。

特に五家の宗風のうち僞仰、雲門、法眼、曹洞の順に亡び臨濟が最後まで比較的残つてをるのは看話の力と榛喝至上主義の賜であつた。

現在も其の通りで殆んど臨濟のみとなつた。

朝鮮、臺灣亦それである。獨り日本が曹洞のみ盛んであるのは永平の陰徳と大菩提心の力に俟つものならん。

是やはり看話の長所は只管よりも人の眼を早く開けるにある。速かに智見を磨くのも便利であり又師家としても樂である。公案によつて智見を開くのは容易い道理があるからである。

白隠に到つて五、六百則に近い話頭を看せる様になり、其法孫は倍す煩鎖なるを誇とする様になつて來た。是れまた大なる弊害である。智見を磨くのは好いが狂惠となり天魔禪となる弊がある。只管は定惠圓明を得易いから尊いが、師學共に道格深く道眼圓明でないと比較の見性が遅い。智見を磨く點からは看話に劣る。假令只管で悟つても平等智は得ても妙觀察智は得にくい。妙觀察智を得るのは話頭が長所である。だが話頭は初めにはそうでもないが、次第に

坐禪の目的を忘れて坐禪を以て開悟の手段とのみなし、たゞ悟りたいと云ふ乞食禪に墮ちざるものはない事となる。だから若し悟らないで坐禪を二三年で止めると貴重の時間を無駄に使つたかの様な氣になる。かゝる乞食根性で坐る奴は、若し小悟でも得られると最早坐禪は要らぬと思ふ。かゝる病人が大部分であり、大悟了得すれば、坐禪は要らぬ閑雲野鶴を伴として禪法螺でも吹いて不陰徳の仕放題で一生を終る敗種の病人が出來易い。困つた事だ。是れ話頭のみを看、佛祖の聖教を拜せざるからである。

而して坐禪の目的は佛弟子の佛行であり、自家の坐床に安住することであり、佛弟子の本分事である。また無始の無明を斷破する唯一無二の大道であつて三祇劫の大修行道である。無始の無明を徹底的に斷破するのは千年や萬年で出來る仕事ではないぞ。大悟徹底して始めて本修行に入るのだ。本修行道は坐禪による以外にないが、方便道としては禮拜、看經、作務等々も時に實行する。だから發心の最初より一切先輩の指示に隨つて無上道の實現三昧として右の諸行をなすのである、が其の内容は始中終を透して坐禪三昧である。初心後心共に坐禪を専らとすべきである。之が佛法の全體であつて外に別の事があるのではない。

之を深く信徹して是を實行すれば見性を急ぐことも要らぬ。何時かは大徹する。又其の半面には生死事大無常迅速であり、また實に佛法に値ふことが難いから、早く大解脱を得なければ思想的にも、職業的にも、生活的にもふらつくから、成るべく速かに大悟大徹して生活を確立して迷はず實行するのが安全の第一方法であり、また教育家至要の職責であらねばならぬではないか。更に二義門三義門に下つて考察しても説教演説するも坐禪の徳を歎へるより道はない。看經觀法等八萬四千の法門を攻究しても坐禪の思想的理解に外ならないではないか。即ち心眼を開き無上道に活歩する道理を示すに外ならないではないか。空間的には即今々に現成して行くべきであり、また時間的には生々世々佛法に値ふことは容易でないから早く悟りたいと急ぐべきである。殊に早く獨り立ちして衆生教化の大責任を果すには可成早く悟らねばならないのである。其れには看話に長所があるが、看話禪は師が十分の師でないといふと淺劣なる芝居佛法の遊戯と我見の上塗りに終る。けれども彼の概念佛法よりも事實に近い智見を磨かしめる。

只管の長所は定力をよく熟せしむるにある。他國の塵境に去來する分別妄想即ち百花草裡を過るも一葉身を濕さぬ力を得せしむるを主眼とする。故に只管は正慧よりも正定を鍊るを長所

とする、正定は物事に拘泥せず、五慾六塵に染まらずドツシリとして隨處に主となるの道である。無論菩提心が確立し、長く退かぬ大願心ある人でないと智見が割合に具らないから往々執定と有漏の邪禪に墮る恐れが甚だ多い。只管打坐は智見を伴とするから宗乘學にも暗い、殊に思想的に取扱つても見性せなければすつきりしない。

明治時代には善知識と云はれ乍ら、さて實際は見性のかすりきづすらないのも往々あつた。宗門系統では奕堂、環溪、鼎三の三師等は知識としての最後の明星であつたらしいが、其の門下の人々を見ると全く無眼子であるから彼の三師の悟道も少々疑はざるを得ない。

又眼藏家としては月潭以前は知らぬが月潭以後は淺き見性すらも無かつた。それでゐて知識なり宗學者なりと自他ともに許して平然たるのである。其内の一例として嘗て西有禪師が書かれた「安心訣」の書を見てもわかる如く、今日は量早や見性成佛は不可能であるから只歸依三寶に依つて安心すべしと云つて居らるゝ。宗乘學としては西有系統が最も盛であり、無事禪と宗乘學者との両者が宗門に並び行はれたが、今日は兩者ともない。何と云ふ末法惡時勢であらう。噫、西有禪師の七十歳の祝筵の時仰せになつたお話でも分る。即ち山僧十八年間月潭和

尙に隨侍した。悟りは必要なしと教へられて來たが、七十歳にして始めて見性の必要な事を悟つた」と云はれて居る。唯一の眼藏家であると云はれた月潭師に十八年も隨身した御本人すら其の嘆きがある。けれども若し看話禪に參ずれば、斯かる淺薄な誤解には陥らない筈である。惜しむらくは只管打坐の無眼子の宗學者に參ずると斯る事すら分明せない。是れ智見が立たないからである。

然し看話禪も今や全く眞風地を拂ひつゝある。何れに參じて見ても深き認識觀か淺き相似禪のみだ。是れも全然悪いと云ふのではないが、是れを以て悟道であるとするに至つては佛祖の波羅夷罪である。納の最初の參隨の師匠は渡邊實英老師であるが、老漢は鼎三（白鳥）環溪兩師に十數年隨身せられたのであるが深き認識悟を許されたものである。杉本老師や鎌倉悟は誰にでも一と接心毎に二ツ三ツ位の公案を許したものだ。だから看話も只管も用ゆる底の人が用ゆれば皆大光明を放つけれど、相似の惡師が用ゆると大害がある。大惠と宏智の最後の商量に、大惠曰く「彼（宏智）は定を先にして惠を後にす、吾は惠を先にし定を後にす」と。要するに定惠等學でなければ佛法は實現せないのである。だから看話と只管を圓轉一如に參究す

べきである。是が古人の妙唱妙用である。殊に今人は道心が少ないから只管だけでは皆逃げてしまふ。話頭に依つていさゝか佛法の影を見せて、而して後に只管の實行を勤むべきだ。故に正法眼藏辨道話に「道を見るもの道を修す」と本淨禪師の語を引いて示してゐる。見性は坐禪を見破つたのであり、行道とは坐禪であり、證入とは坐禪である。坐禪の外に佛法は毛頭ない。佛法の全部は坐禪の實行であると明確に信徹すべきであらねばならん。唯修證邊からは定を先とするか惠を先とするかであり、方便道の上からは上根のものは只管に依るを良しとするが、中根のものは其の時々の宜しきに隨ふべく、下根のものは話頭に依つて先づ見性して然る後に只管の實行に取り掛るのが宜しい。但し是れとても定盤星を認めてはいけないけれど。だが見性を強求するものは先づ話頭を見るを良しとす。下根の下根と、上根は只管に依るのである。何事も極端と極端は一致するの道である。永平も二代様に話頭を授けられた。三代徹禪師も太祖を接するに話頭に依つて徹せしめられた。然るに古人の言葉の表面のみを見て其の眞意を知らなければ、我が宗門は話頭を用ゐてはならんなどと誤る連中が、只管、話頭の何れかに墮するのである。

實は永平は一毫無佛法だ。話頭も只管もない。ないから只管話頭隨類三尺である。たゞ永平時代には話頭禪弊の最も盛な時代であるから、これを戒めて只管を中心とせられたまでである。皆時所位に應ずる接化の手段のみである。然るに其の言葉の眞意を了らず、只管に執はれば話頭の弊害と同じである。衲は未熟ながら兩者を打破して兩者を駕御してをる。即ち兩者を取らず兩者を捨てずして道用をなしてをる。現代の臨濟の宗匠方は出家にはさうばかりではないが、在家に對しては實にひどいものを許してをる。誠に像法末期の悲哀であると云はねばならん。彼方の師家に許された人が衲の處へ来て骨折つて居るものも仲々ある。自ら肯ふて居りませんと云ふても、師が其れで好いのだと押賣的に許して居る連中もあるとの事である。何と云ふ戯論であらう。

大根機を發して話頭に參じて、どつしりと坐つてさうして、団地一下の時を待つべきである。是が眞實の禪である。只管打坐は吞氣坐禪に陥る弊害があるから十二分の注意を要する。之を山登りに譬へると話頭は富士山に登る金剛杖であり、只管打坐は金剛杖の方便助力をも借らず大手を振つて登る様なものである。要するに話頭を誘ふものは眞に話頭に參せずして話頭

の眞味を解せないからである。

眞實の話頭禪は只管打坐と全く同一にして且つ力ある禪定である。衲の所では下の下は數息と只管、中機は話頭、上の人は時の宜しきに從つて時に只管、時に話頭を見せしめて居るのである。實は禪に二三あるのではない。みな唯一乗法無二亦無三の無上道である。たゞ殺活取捨時に隨つて活用すべきのみである。

畢竟するに話頭禪は方便禪であり、只管打坐は眞實道である。然し上中下根によりて大方便道を要するのであるが、方便即眞實の大道なることを知つて時に從つて横拈倒用するや皆是れ一乘實相の大法施となるのである。されば只管打坐も執取すれば一擧にして邪道となるのである。だが哀哉、今や我門下にも宗學の素通り連中に禍されて、只管を固執する邪思惟漢が中々多いのである。是れを世間的の語で評すると最負の引き倒しと云ふものである。但しそれも實は妄談するのみであつて實行者は一人もない。

大惠以後の臨濟宗には只管では佛祖の惠命を持續出來ぬと主張し、現代の曹洞宗徒の多くは話頭禪は正傳の佛法でないと言ふけれど、彼等は共に佛祖道の門外漢であつて、古人の糟粕を

なめる九官鳥である。彼等もせめて一度理趣分経を心讀すれば目が醒めるのであるけれど、いや心經一卷でも真に一讀すれば瓦解氷消するのであるのだ、如何々々。

要するに坐禪は悟りの爲のみの道でない事を徹底信じなければ分明するものでない。だが悟らなければ眼が開かぬ。眼が開かなければ安心が出来ぬ。古人の糟粕今人の妄想に轉せられるから大に急いで悟る必要がある事は云ふまでもないが、悟つた後は益々大いに必要となるのである事が分明するのである。古聖先徳が三位を設け、五位、十牛圖等を設け、乃至五十二位などを設けて三祇百劫等の修證を示したのは決して誇大ではないぞ。決して百年や萬年で成就する淺薄な道でない事が見性らしい見性すれば分明するのだ。彼の天魔禪者流の夢にだも知るところではないぞ。兎角天魔禪者流は惡平等の斷見に落ちるし、教者沒知どもは惡差別の常見に落ちるのだ。が見性らしき見性すると一位即一切位を知り、一切位即一位の三昧を肯ふことを得て、自高せず自屈せず穩々蕩々として道を行じ道に進むのである。この邊の眞消息を知らんと要せば先づ五位と十牛圖に能く參徹して、而して後に五十二位の各位を味ふが好い。始めて向上の一路に何千何萬何億位のある道理が明了する。並びに何億位あるも只此這箇の一位なる

ことを信得する時感涙襟を濕すことを覺えるわい。

この何億位とも分らぬ階級をまた、何億年間を費して向上して無上人格を成就するのであるが、其五位の第三位「功位」に自己の無上道を見破るものである。是れを見性とも見道とも云ふのである。たとへば地上約二十四哩の高處まで空氣が充ちて居るとすれば下層ほど濃くて上になるほど漸次薄くなる、其の空氣の濃度により氣壓の運動の都合で一吋真空を生ずることがある。其の真空に人の肉體が觸れると怪我をする。この現象を或る地方ではカマイタチに切られたと云つて居る。吾人は無始劫來、濃厚強烈なる無明煩惱の空氣中に没在して居るのであるが、一念發起修行が始まると煩惱の空氣が動搖を始める。追々盛に動搖し運動すると、時に無我の真空に當面してはつと自己來來の眞月を眺めることがある。是を見性、見道、見佛などと云ふのである。

即ち徹底分別のないとき見性するのである。平常を等閑にしてはならぬ。否平生を最も注意すべきである。例へば彼の説教演説や諸種の藝術を練習するものも亦其の通りである。不斷一寸のことも氣を付けなければならぬと同じである。親切に努力工夫すれば思はぬ時に因地一聲

があるものである。故に平常油断する弊を尤も戒むべきである。

何人も佛性の所有者である。否、佛性それ自體であるから悟れないと云ふ人は半人もない。然るに悟れぬと云ふ人は要するに確信と決心と親切がないからである。たとへ右の三心が充分でも修行が熟さなければ悟れないまでである。だから熱心に實行しつゝあれば不用意の時でも何時氣が付くかわからない。坐禪して居る時ばかりでない。突然真空になる時がある。この時廓然心月を見破るのだから坐禪に於て其の力を勵んで置けば何時お目にかゝるかわからない。ふとした時に妙處が手に入るものだから平常注意して工夫をしなければならぬ。動中に於ても靜中に於ても。至禱々々。

誠に夫れ無常を觀する時吾我の心生ぜず名利の念起らず
時光の太だ速かなることを恐怖す所以に行道は頭燃を救
ふ身命の牢からざることを願す故に精進は翹足に慣ふ

八、修業時代の追憶

私が小濱の學校に居た時は臨濟宗では獨園和尚、曹洞宗では坦山和尚が偉いといふ評判だつた。

以前から遠敷の神通寺の和尚から、坦山流の坐禪を聞いて坐つて居たので、大學へ行つたら坦山和尚に參じられると非常に期待してゐた。

ところが大學へ行けるやうになつた頃、坦山和尚がなくなつた。仕方がないから、まあ臨濟宗へ行かうと思つて常高寺（小濱町妙心寺派）へ行つて「これから臨濟へ修行に出ようと思ふが、獨園和尚が偉いさうだから獨園和尚へ就かうと思つてゐるがどうか」と聞いて見た。和尚曰く「獨園和尚は偉いには偉いが、あまり老僧で學人接待にはよくないだらう。若い師家で偉い人の方がよい」とかう言ふので、そこで伊深へ行つた。

見性はしても、とろい坐禪ぢや、何時までたつても境涯は出來ないものぢや。

自分が自分を許さないといふことに二つある。一つは、幾ら師家が許しても肯心自らゆるせ

ないといふこと。今一つは思惑が取れないで許せないといふ事、この二つがある。さうぢやらう、幾ら悟つても思惑が取れなくてはなんにもならない。けれども佛法は因果無人よりないのだからなあ。

坦山和尚の坐禪は命がけて腹へ力を入れる坐り方だ。坦山和尚の著「惑病同原論」によれば、人間の心即ち本來の面目は前額部に鎮座し、八識は後脳部にあり、七識は胸、前六識は腹にあるといふのだ。

一體坦山和尚は何處の師家へ行つても許されるが、自分自ら肯せないで、三十五年の間、自分獨得の修行法で工夫された人で、六十になつて始めて修行成就されたと言はれてゐる。

そこで坦山和尚の坐禪の仕方だが、先づ始めは無茶苦茶に腹に力を入れて坐らせる。そして前六識をぶち切る。それが出来る胸へ力を入れて七識を切る。それから後頭部となる。腹や胸の定力が幾ら出来ても後頭部の無明が切れないうちは、矢張有漏の定力だといふのである。後頭部の掃除が出来なくては、その無明がずうと下へ降りて行つて、何時までたつても結局徒勞に歸する有漏定といふのだ。

併し、腹部の定力だけでも恐ろしいもので、和尚は常にこう言つてをられたさうである。

「腹が出来たら試みに一圓持つて吉原へ行つて見ろ。性慾は起きないものだ」と。

この坦山流の坐禪の面白いのは、かういふことを教へて居る。立つてゐても歩いてゐる時でも働いてゐる時でも日に四時間一回一時間づつとして、下腹へうんと力を入れて力んでゐる。只それだけでいゝといふてある。

坦山和尚はあゝした頑丈な人であつたから、さうした修行も出来たんだが、その式の坐禪をやつた人は皆若くして死んで了つた。たゞ高田穎哉師と野澤達玄師の二人は、後繼者として坦山下の二神足だと言はれてゐるが、その他は半途で大概死んで了つた。

或る時坦山和尚が大學（曹洞宗大學）で起信論講義をされてゐた時、講義が終つて立ち上り際によろ／＼とよろめかれたさうである。「へんだな平素あんなによろめくやうな老僧でもないんだが、今日はどうしたのだらう。」

皆はさう思つて見てゐた。すると老僧はつか／＼と本尊さんの前へ行つて、本尊様に向て、「老僧はこれからモー參らないかも知れません」さう言つてすうと歸つて行つた。それから間

もなく遷化されたが………

坦山和尚はなくなられる間際、四十日もの間、斷食をなされた。行者の者は心配して、「どうして御飯を召し上らないのですか」と聞くと、

「そんなことお前等に分るこつちやない」言はれてどうしても食べなかつたといふ。平素は中々剛健であつた。

「老僧がもし病氣したら納の言つた事は皆嘘だと思へ」と常に言つてをられたさうである。實に偉いものだ。

臨終の時に床に起き上つて、

「老僧只今臨終 仕り候」といふ知らせの葉書を書いた。侍者の者が見兼ねて、

「そんなことは老師がなくなつたら、私達が書きますからお休み下さい」さう云ふと、只「さうか」と言はれてそのまゝ休まれた。

どうも御臨終が近いらしいと云ふので隨身の人々は、最後の書を書いて戴かうと澤山紙を持つて來た。老僧暫く筆を揮つてをられたが、

「少し疲れたやうだから一寸休む、お前達の間へ行つて居てくれ」とかう言はれる。

そこでお傍の人達は次の間に控へて小一時間ばかりして行つて見たら、もうなくなられて居た。その以前お傍の人が、

「古人は皆坐脱或ひは立亡なされてをるが、老師はどうして死なれますか」と聞くと、「死ぬ時は矢張り横になつて死んだ方が樂ぢやらう」と言はれたさうだ。

私も小濱の學校に居た頃から、坦山流の坐禪をやつて、うん／＼腹へ力を入れて坐つてゐたところが、その頃へんに頭鳴りがした。をかしい／＼と思つてゐた。伊深の僧堂に行つても腹力は止めなかつた。その後大學へ行つて、坐禪をやらなくなると、比較的頭鳴りがやんでゐる。やり出すとまた鳴る。どうもへんなので、その方の人に聞いて見るとそれは力の入れ方が悪いのだ、もつとうん／＼力を入れて坐れ。併しどうも頭鳴りがやまぬ。不思議でならぬ。長い間腹へ力を入れて坐ることに疑着を持つてゐたが、後年毒湛和尚に參學することになつた時その時は、こつちは全くの乍入叢林でありますと申上げて、自分が今までやつて來た坐り方に就いていろ／＼聞いて見た。その時毒湛和尚が例の穩やかな低い聲で、

「古人は色力剛健だから、さうした坐禪も出来るが、今人は氣根が衰へてゐるので、それ相應の坐り方をしなさい。」と

たつたこの一語で、これまで長い間の疑着が、からつと晴れた。長い間疑着してをつたお陰であると思ふ。

順境如^レ春。 出遊觀^レ花。 逆境如^レ冬。 高臥觀^レ雪

春固可^レ樂。 冬亦不^レ惡。

九、反宗教運動に就て

全體反宗教運動はロシアに起つたもので、一つの團體としては最近の事である。宗教を邪魔物として見る事は洋の東西時の古今を問はず、いつでも何處でも多少ある事であるから別に珍らしくはないが、今回の反宗教運動の主旨は觀念は全部いけないと否定して事實の世界のみを肯定せんとするのであるとの事である。而して其根據は唯物論である。その反駁する宗教は大體キリスト教で、殊に、ロシアであれば舊教である。そもく舊教も新教もキリスト教は二元教である。即ち神、人を別に見て、神は天國にあり、人は地にある。その奴隸であるとするのであるから、吾人の理知より見れば全く迷信である。人知を無視して幻想所産の神の命のまゝに従ふべしとする。神を概念上より作り、超自然上に認めるのであるから元より迷信で、人の觀念上に作り上げたもので全く事實ではない。佛教ではこれを妄想と云ふのである。

今の反宗教運動はすべての幸福を神や天國に奪はれたのを人間界に引戻さんとするのである。科學の見地より眺めたるもののみが事實であるとするのである。ロシアが先きに立つて呼

ひかけて居るのであるが、我國でも思想的のみならず實際運動に出たのがそれである。

我國にをいても、遠く明治維新の際の廢佛毀釋運動は深き眞理を知らない青年政治家たちが頼山陽の日本外史等に根底を發したのであつて、彼等の廢佛棄釋も王政復古といふ政治的の實力のある勢で一時的にやつたものであつて、思想的でなかつた爲に佛敎は直に復興したのである。ところが今日は思想的に起つて來た運動であるからして問題が大きい。正法を信ずる吾人は玉石共に焼かれてはならん。

何人の聲を聞くも、宗敎は自然の聲で人爲的にこはし得ない。これを強ひて壊せば自ら精神の安定を得ず、社會の安寧を破るものであるとするのが宗敎論者の説であるが、これも一面の眞理のみだ。宗敎は洋の東西、時の古今を問はず存在すると云ふのは原始的な云ひ方であつて、我々正傳の佛法から眺めるならば、もつと根本的な見分け方がなくてはならないのだ。今の反宗敎運動撲滅論者に眞の宗敎心なしと云ひたい位である。

そも／＼かのレリジョン Religion は宗敎ではない。レリジョンの定義は百種百様あるも、要するに二元的不徹底な邪見迷信を云ふのであつて、個人的民族的にも今猶さうした信仰をも

つてゐる者が多い。が正傳の佛法を信ずる者は宗敎、宗旨、宗門、宗乘等の語は佛敎でも中古までは各宗でも用ひなかつた。獨り正傳の佛法に於てのみ用ひたる事を知らねばならん。「宗」と云ふ言葉は極めて肝要な言葉で、宗は崇なりで、崇敬の義であつて、横に一切の人類、縦に一切の賢聖、佛敎的に云へば人間天上より聲聞緣覺菩薩佛陀に至る迄いかなる者も頭の下がる、即ち崇敬すべき絶待價値を有する敎と云ふことを宗敎と云ふのである。我々の頭の絶待にさがるとは、知、情、意の三つのどの方面より見ても頭のさがるものでなければならん。理知の方から言へば最高の哲學でなければならん。ベルグソンが大直覺によらなければ眞理は得られぬと云つて居る。佛法を除いた一切の執敎は未だ全く結論に達して居ない。正傳の佛法のみが結論に達してゐるのである。即ち三種の三寶即一の大道がそれである。一體三寶が最高の哲學、現前三寶が最深の宗敎、住持三寶が最善の倫理である。詳しい事は略する事にする（希望に輝ける生活の正信の項を参考せられたし）斯様に正傳の佛法のみ一切の最高の結論に達して居るのである。説明のため便宜上知情意の三つに分けて居るが、實は絶待であり、全一である。一切の人類、随つて一切の賢聖も絶待に頭のさがる道は我眞事實の佛法の外にない。釋

尊と雖もこれ以外に出られぬ。これが宗教である。今は内容方面から話したのであるが、これを歴史上から見ても、此の地上に於て我眞事實を大悟徹底し、絶待の道と同化された人格者は釋尊一人のみであつて、一切の菩薩と雖も未だしてある。即ち、釋尊は教の總本家であらせられる。その他はあつき合ひ的に云ふても不徹底不完全なる教へであると云はねばならぬ。これを奪つて云へば他の迷執教は全く邪見迷信に過ぎぬ。佛のみが教の總本家で同じ佛教と云ふも各宗はその宗の祖師が龍樹の書かれたものから、自身の見識と合する所をとつてつくり上げたものであるから、これ亦哲學に過ぎぬ。只面授相續せる正傳の佛法のみが宗教宗旨である。道を完全に體驗せられたるは獨り佛のみで、其教へは誰でも頭のさがる教である。

各宗でさへも宗教と云はぬのであるから、況やレリジョンや淫祀邪教をやである。この正傳の佛法を簡條的に云ふて見ると、第一本具佛性即ち衆生本來成佛を信ずること、第二自我の迷執を信ずること、第三生命の持續を信ずること、第四因果必然を信ずること、第五諸佛の實在を信ずること、第六成佛の過程にある事を信ずること、第七自他元來一體なる事を信ずる事、第八感應道交ある事を信ずること等である。

されば宗教心は衝動的に起ると云ふ丈では物足らぬ。我本質が動物時代には共同生活丈ですんで來たが、人間世界に出て來ると精神問題、思想問題が起つて來る。所が之等の問題に無關心で物質的満足即ち衣食住の事ばかりに歩いてゐる唯物史觀連中を、私は動物と人間のアイノコ位しか進んでゐないと云ふのである。これ丈では人間らしき人間はどうしても物慾だけでは満足出來ない。そこで必然的に物質だけでは不愉快不安心でたまらなくなつて、我本質の目覺めの第一歩たる煩悶が起きて來るのである。ここに於て初めて人間と云はれるのである。かゝる煩悶なき者は、いかに社會的地位學問があつても半獸的人間である。

宗教は我々の先天的要述であるからして、どうしても壊せるものではない。人間として宗教なくんば無限の光明永遠の安定が得られるものではない。無限の光明永遠の安定を與へるのが我々僧堂安居の任務であり責任であり、大菩提心であらねばならぬ。だから私は反宗教運動に就ては心配所か、むしろ歓迎して居る。日本の半分か三分の一位が反宗教運動者になつて貰ひたい位である。(がそらなる様な事は決してない)かゝる運動は何時でも天の一方にあつて欲しいものだ。こゝに於てか我々の任務の重大なる事を自覺して猛修行をなさねばならぬ。

一〇、先師の遺訓を偲ぶ

七四

小生は少年已來極めて腕白でありました。先師祖道大和尚も若い時はカンシヤク持であつたから生疵が絶へる間がなかつたくらゐです。殊に學問は大きらいであつたから、小學校へ入學はしたが、先生の云ふ事なんか決して聞かない。聞かないばかりでない、先生にたてついて先生を困らさねば承知せんと云ふシタ、カ者であつたから、入學二三ヶ月で退校處分を受けてしまひました。受けてしまつたけれど一向平氣なもので學問がきらひなのであるから、結局これを好い事にして日を過しました。

寺の門前に小生より一つ上の金藏と云ふ農家の少年があつた。平素の遊び友だちであつたが、此の少年は學校へ行つて眞面目に勉強してをるから學問がずん／＼上達する。小生は依前として吳下の舊阿蒙である。先師が時々金藏は一生士をほじくつて生活する人間だ。お前はそれを教化せねばならん坊主になるのではないか。それに金藏はおとなしく勉強をする。お前は讀本一つ讀めないではないか。それで恥かしくないかと屢々云はれたものである。けれどもおあ

いにく様で一向恥かしくも何ともないのであつた。先師が留守になると村中の腕白仲間を集めて餓鬼大將となつて、寺の内外をあばれ廻るのが日課であつたので、先師を泣かした事も一再ではありませんでした。が十四五歳に及んで始めて是れではならんと云ふ事に氣がついた。

いさゝか氣が付いて見ると他の同年輩のものはみな能く勉強してをる。とても恥かしくてまご／＼して居られぬ。そこで漢籍の夜學に通ふたり先師からも習ふたりしたけれど容易に追いつけさうもない。その頃隣寺の大和尚の提唱にも拜聴に出懸けてをつた。小生の聴きそこないも多量であつたであらふが、隣寺の大和尚の提唱に時々學問々々とぬかすが學問などは黒豆勘定だ、いくらしても法の道理が分るものではない。海の眞砂子を數へる様なもので果してはいぞ。古人はみな學問の價値なき事を知つて、學問をサラリと捨て、山に入つて正師に就いて坐禪したものである。坐禪さへすれば學問では永久に要領を得られない天地の道理も、佛祖の妙道もみな廓然大悟の一擧に手に入るわい、つまらん學問などを捨て、みな坐禪せい』と云はれたものである。

そこで小生は考へた、成るほどさうか、學問など黒豆勘定するよりは、我宗に於ける全國的唯

七五

一人者と云はれる大禪知識について坐禪しよう。さすれば彼等同年輩の小僧達の黒豆勘定がたとへ一斗にならうが一石とならうが千萬石にならうが知れたものだ。自分は命懸けで坐禪して五年十年の後は一擧にして無數石を得て、天地の道理も佛法の妙道も一擧にして手に入れて見せる。是れが最も捷徑であり、最も完全であるのであるわいと一決した。それから誰が一番えらい大禪知識であらうと聞いて見ると當時加賀の天徳院に森田悟由老漢（後貫主となられて性海慈船禪師となられた）と云ふがあつて天下唯一の大禪將であり、大叢林であることが分つた。ところで恰も好し、小生の地方に當時大安泰順和尚と云ふがあつて、右の天徳院に七八年も隨身をして歸つて來た禪衲があつた。この人また頗る評判が好かつた。身体は余り大きくない人であつたが、押出しも立派、態度も立派、落付さも十分、演説もトテもうまい。讀經維那と來ては地方で一品であつた。世間是れを評して曰くエライ流石に天徳院の舊參だけある。學校出のヒョロ／＼坊主ども到底足下にも追ひつかんといはれたのです。この大安師の如きも學問はした人ではなかつた。なるほど隣寺の和尚の提唱を大安師に依つて完全に裏書して呉れた觀があつた。そこで小生何の躊躇するところがあらう。斷乎として天徳僧堂に掛錫する決心は儼

として立つた。

早速右大安師に懇願して天徳僧堂安居の手續の様子を聞き且つ悟由老漢への添書をも頂いた時に歳十六であつた。歡喜踊躍の至りに堪へなかつたのである。そこで先師に天徳院安居を願ひ出た。然るに先師は絶對に許可して呉れない。坐禪ばかりしたとて學校教育を少しも受けなゝいものが何になる。是非とも學校へ入れと云はれるのであるが、小生はまた何としても天徳僧堂へ行かねばならんと云ふて聞かない。先師は高壓的にしかつたり又穩かにだましたりして學校へ入れんとせらるゝのである。何としても許しが出なければ逃げて行く覺悟をさめた。當時福井縣下に一校宗門の僧侶を入れる小學校及中學校三ヶ年までの學校が小濱町にあつた。それへ入れと先師はお勧め下さるのであつた。何としても許しは出ないと定まつた。しかたがない明後日脱走して行くこと定めた。柏庭と云ふ同年輩の小僧で小生と天徳院へ同行の約ある者が一人あつた。柏庭兄は右小學校に居るのである。明後日脱走する申合はせに柏庭兄を小學校に訪問した。時に小學校學監は右の大安泰順和尚、而も添書まで書いて下さつた人であるが柏庭兄に會ひに行つたところを大安學監に見つかつて、「祖岳さん一寸學監寮までおいで」との事で學監

寮へ行つた。そこへお坐り少々話があるからと。大安學監曰く叢林安居本より大賛成なればこそ添書を與へたのである。けれども今後の時勢は學問もせなくてはいかぬ學問をしてから叢林に行かなくては物の役に立つ禪僧とはなれぬ。お前様の御本師様が非常の心配してをられる。決して爲にならん事は云はぬから今回は學校へ入學せよと懇々と説論せられたのである。他の人の説論なれば絶対に耳を傾けないのであつた小生も坐禪の経験もあり、添書まで呉れた人がかくも熱心に學校へ入れと云はれるのであつたから、それでは學問も必要かなあと思ひ、また先師の熱心なる意旨に背くは何だかすまない様な氣にもなつて、とう／＼小學校に入學する事にきめてしまつたが、さて十歳前後の小僧までが一年生の何級、二年生の何級と云ふのである。自分は十六歳にもなつて一年生の初級からは何としても入る氣になれない。幸ひ當時は力量次第で入學の節に通試と云ふ事を許したのであるし、入學試験にはまだ六ヶ月ほどあるから、此間にうんと勉強して通試出来るだけすると決心して勉強を始めたお蔭で二級通試に及第して二年生に編入した。入學して少々勉強して見るとなるほど學問もせねばならぬ道理を實感した。但し坐禪する事は止められん。止められんが大學卒業すると直に僧堂に行くと決心して爾來熱心に勉強して二十一歳の七月全科卒業したのである。

今から考へると學校へ入學したのが法の爲めに好かつたのか、入學せないので僧堂へ行つた方が好かつたのかは佛ならざる身には分らない。入學しないで僧堂へ行つた方がズート道に圓熟したかも知れんが、或は今よりも墮落した人間になつて居たかも知れん。其點は不明ではあるが、先師の小生を玉成せんとし給ひし、厚き眞情はかくまで微懇であつたと云ふ事を思ひ出して全く血涙のしみ出るを覺えます。

既に國の學校は卒業した。兼て決心の通り、直に曹洞宗大學林の競争入學試験に應ぜんとして大學林行きを願うたが先師は學資の餘裕がないからとて、行く事を許されなかつた。なるほど大學林の學資を下さるほどの餘裕がない寺である事はよく分つてをる。けれども不足の分は苦學してでも行きたいと云ふ希望で願うたのである。先師は苦學などさせると往々墮落するものであるから苦學させてまで大學へやり度くないと云ふ先師の深意であつた。そこで小生は考へた。なるほど大學へ行くとすれば本師に非常な苦勞をかけることになるから大學は縁あれば行く縁なければ止めにするとしても好い。それでは僧堂へ行くことをお許し下さいと願つた。是

れもお許しが出ない。お前が寺に居らねば不自由であるからと云ふのがお許しの出ない表面の理由であつたが、小生は何を犠牲にしても天下一の僧堂に行きたいと云ふ希望心は半平として抜くことが出来なかつた。その理由は云はずもがなだ。最勝の善身を受けたと云ふ事は出家して叢林へ行つてウンと修業して己事を究明するにありと云ふ事を深く信徹してをつたからである。叢林に行つて大事を了得して人天の眼目となれば師恩も四恩も一時に完全に報答することが出来るのである。一時の小不孝はかまふことはない。深く確信してゐるのであつたから斷じて思ひ止めることは出来なんだ。先師もまた何としても許して呉れない。しかつたりなだめたり、されど小生の心は鐵石の如くであつた。到頭先師は一切の不自由を忍んで許して下さつた。小生は實に涙を流して感謝した。

さて明日はいよく出立と云ふ前晚ご馳走をして餞別の意を表して下さつた。その餞別の藥石の際、先師は徐ろに口を聞いて誠めて曰はるゝやう「私の不自由する位な小さな理由で叢林安居を許さないのではない。禪坊主が坐禪修行に行きたいと云ふのに其れを許さない」と云ふ法はない、けれど下手に悟りそこないの片輪坊主になるよりは、却つて修行せないで眞面目な坊主に

なつた方が好いからだ。お前も知つてる通り若狭に二人（御迷惑否死屍に鞭打つことになるから姓名は遠慮する。一人は四十年前遷化、一人は七八年前に遷化せられた）悟りそこねの片輪坊主があるだらう。あんなものにお前もなりはせぬかと思ふて今まで許さなかつたのであるが、どうしても行くと定まつたからは行くが好いが、あの様なかたわ坊主になつて呉れるな、是れがお前への唯一つ餞別である」との事であつた。その當時はこの餞別の訓戒即ち頂門の一針を大して尊い訓誡であるとも思はながつたが、たゞ其の命に背くまいと心に深く誓ひました。それから當時臨濟宗において天下随一といはれる濃州伊深の正眼僧堂に掛錫することとなつた。初め二ケ年は全く無我無中で坐りました。三ケ年目の夏制に兎に角些子の見性が出来ました。爾來小悟が幾度もあつた。小生程度に大悟も兩度あつたが、いさゝか悟れば悟るほど人が馬鹿に見える。分らず屋や無事禪者流から質問も受ける。或はからかい半分に議論も持ちかけられる。又人が問ひ掛けなくとも押賣説法もしたくなる。變つた態度、變つた風采もしたくなる。その度ごとに先師頂門の一針を思ひ出して自ら深く反省しては其の惡むべき烏臭法惑を出さないやうに注意を怠らなかつたのであるが、それでも中々無意識的にも出る有意識的にも出る。出たと知れ

ば直に反省するが、元來かんしやく持ちの小生は時々出たと意識しても其態度を急に引込める勇氣にとぼしかつた。その爲大學生時代でも大部分正法を信ぜざる學友同志と強烈に争論することがあつて相當かはり者とせられいやがられたものであります。いや今日と雖ども其の病氣が完全に取りれたとは保證の限りではありません。恐るべく惡むべく憐むべきは法執です。烏臭です。但し正法の佛法外では各宗でも各教でも法執を以て信仰だとしてをる。況んやあらゆる思想でも諸事萬端でもその執らはれを以て道であると妄認してをる。彼の現代しきりにはやる『愛』なるものは全く執らはれの標本だ。我が正法では淨愛を高潮すると共に彼の痴愛を迷執邪見の根源として絶對に排斥するのである。彼の法執も要するに痴愛であり痴執である。先師向の上の饒別の頂門の一針がなかつたならば小生もまた立派なカノ片輪坊主の中間入をしてしまつた事と思ふ。是を思ふたびに悚然として恐ろしく思ふと、とも誠に先師の訓誡を忝けなく思ふてをるのであります。小生の如きは今もなほ片輪坊主ではありますが、アノ一針がなかつたならば一層鼻もちのならない片輪坊主となつてをつたであらうと信ずるのであります。師恩の廣大山海の比ではありません。

嗚呼大いなる哉師恩、吾れを知り吾れを育て吾を眞乎淨愛し給ふは天地廣しと雖も唯先師あるのみでした。不孝先師の幻身は去る昭和六年四月三日午後三時二十五分七十七年の遊戯三昧を了つて、忽然として更に高峰に向つて登り去られてしまひました。今や天下孤雲の身いつまでも涙は痛腸より出づるを禁ずる事が出来ません。噫。

親の恩齒が抜けてから嚙みしめる
 孝したき身には親なし魂祭り
 叱られたこともこひしや魂祭り
 うたた寝も叱り人のなき寒さかな
 雪の日や不孝者めの身を案じ
 寝て居てもうちわの動く親ごころ
 破る子のなくて障子の寒さかな

一一、托鉢の精神

托鉢の精神も一應は知つて置かねばならぬ。其の精神とは佛行を行ずる事である。第一實例で云ふなれば、佛在世の當時は釋尊初め諸弟子は悉く托鉢をして生活をせられ歴代の祖師方も皆さうであつたが、其後漸く墮落して動産や不動産の貯ひに依る様になつたのは佛の精神よりすれば墮落である。釋尊は一國の太子であり、迦葉尊者は印度隨一の富豪であつたから教團の人を養ふにも敢て托鉢する必要はなかつたが、貯ひを食ふのは邪命食の内に入るので佛心に稱はぬ事になる。それで托鉢は如何に大切であるかと云ふに自行化他即ち自己の信心や生死解脱を計り、他人の解脱向上を計る事の外にないのである。己の身體で自他に教へるのだ、言葉でおしやべりをして教へるばかりが教化でない、施をするにも身口意の三つがあるが、要するに退いて自ら修め、進んで人を教へるためである。

布教と云ふても他にはない。自分の修めた處を人に教るのである。只上中下根があるから、上根には第一義の教化で好いが、中下の二根には二義門、三義門の教化法も備へねばならん

が、托鉢は上中下一等の正修行であり、下化衆生の正三昧である。その法縁の熟せると熟せないとに依つて違ふのみで其内容は決して違つたものでない。托鉢は何故上中下根一等の正修行であるか。曰く修行に二種あり、靜中の辨道と動中の工夫であるが、托鉢は其の動中の工夫であつて、閑裡にあつて正念工夫が相續する様に骨を折り、また我見妄想をブチ切るの道である。平素不心得な心が起つた時には如來の遺教にある通り自ら頭をなづべし、剃髮染衣の僧界に入つたのは上求下化を専修専行せんがためになつたのであらう、頭を摩るのは之を反省自省せしめるためである。

動中の工夫とは靜處にあつて鍛えつゝある通り、諸緣萬境の中に飛び込み、其に執はれないで正念相續の出来る様に骨折る事である。

紅塵萬丈中に在つても紅塵に引かれず、綿々相續正念工夫せしめんとするにある。之を公案的に云ふと、只管打坐の人に即處觸處只管只管になつて前後截斷その處その處に一枚になり、話頭工夫の人は其の話頭に成り切り成り切るのである。其の志と其の實行とさへあれば何時何處にても因地一聲の大歡喜が飛び出すか分らん。たとへ此の歡喜は未だしと雖ども、かくある

を聊か佛作佛行の實現と云ふのである。道念なくして托鉢したり、厭々ながらやるのはそれは假令出家沙門であつても決して佛行でない。卑むべき眞の乞食である。當に托鉢をして居る時は物を買はねばならんとか、値をねぎらねばならんとか云ふ様に他に種々と心を用ゆる必要は毛頭もないから、徹頭徹尾上求菩提に成り切れる。

下化衆生は施者の福田となつて親切に福分を植えてやる。又は解脱の因を植えてやるのである。即ち解脱の因縁福分を植えてやるために貫つてやるのである。貫つてやらねば福分を植えてやる事が出来ない。なぜなれば人間は何人も妄我の結晶であるから、自分の所有する物を人に與へるのは生木をさくよりも苦しいとの事である。然るに屢々旋さしめると云ふ眞意は、屢々施す間に狂妄なる所有慾が追々なくなる。初めは己の物を捨るのであるが、次に己を妄認する煩惱も薄らぐ。遂には解脱道に入らしめるとともに、また兼て福分をも培植し得せしめる。所謂福惠解脱を得せしめんがためである。云ふまでもなく又同情心慈悲心を培養せしめる事にもなるのであるから、托鉢は上求菩提とにも下化衆生の道の最も重要なる一の道である。そこで施者に慈悲と福惠と解脱を培養せしめる方からは受けてやるのぢや、が決して威張るので

はない。右の勝縁を結ばせるのであるから、受けて差上げるのぢや。それと共にまた一つには此の信施者の御蔭で吾等は修行が出来るのである。無上道修學の學資を頂くのであるから無上の大恩人ぢや。

一面は他を救ひ、一面は自己の解脱を得るためのものであると云ふ深き信念と實行がなければ托鉢する資格がない。全く乞食坊主だ。

無上菩提の聖行も志がなければ卑むべき乞食坊主である。そう云ふ道理があつて釋尊及び佛祖方は托鉢のみで其日々々々をお暮しになつたのである。それだから托鉢は正法眼藏涅槃妙心であり、無上道を直に體現するの道である。之を簡單に云ふと上求菩提下化衆生となるのである。故に志の如何に依りては釋尊にもなり、普通の乞食にもなり、大願行にもなり、大罪にもなり、又た何んにもならぬ事にもなる。それだから大徳にもなる大願心を起して正法眼藏の體現である此托鉢をやつて貰はねばならん。

それだから托鉢は一つには己の本分を實行する事であり、二つには下化衆生の外はない。眞に托鉢をするものは托鉢に殺されぬ様、また托鉢を殺さぬ様に托鉢を生かして行かねばならん。それには其の深旨を忘れないとにも、其の態度を慎しまねばならん。その態度の尊嚴

は直に一心も尊嚴になる。と共に教化の方から云ふても非常に大切な事である。現代の淺薄者流は態度位何んだと馬鹿にするものもあるが、全く心得違ひである。其の態度は内にあるものゝ表現であるから、其の態度を見て信仰を發した例は古今無數にある。

正法眼藏 洗淨の卷に「威儀の現成する處に佛法現成す」とあるは、己をも度し人をも度するからである。昔舍利弗尊者が御一人で托鉢に出掛けられたが、威儀肅々として其の尊き事云はん方なしてあつた。それを目蓮が（未だ外道であつた時）あれは人前文やつて居るんぢやないか知らんと刑事か何かの様に後からひそかに付いて行つて其の態度を伺つたが何處を通つても同じである。すると尊者は大便に行きたくなられ、人なき原野に出て用をなされた。印度の習慣である。朝鮮、支那及臺灣あたりでも今猶さうださうだが、便所の設けがなかつたからである。佛祖道には、用便後の局部洗淨法がある。人なき原野であつたけれど其の法を丁寧に行はれた。それを遙に見て深く感心し、其の蔭日向のない嚴肅な態度に敬服して佛法に入り、舍利弗尊者と、もに佛弟子となり、神通第一の聖僧となられたのである。つまり威儀現前する處佛法現前するので、自分を度脱すると共に他人を度脱せしめるの力用がある事を道人は深く信受

せねばならん。

其の他萬事道人らしい態度を見て禪に參ずる様になつたと云ふ例がざらにある。その感心すべき一舉手一投足のある人は必ず尊き信念と人格の持主である事がわかる。それ丈け其の人に正法があるのである。猶常に其の人格がなくとも敢て之を行ふ時は少くとも道が行はれるのである。然るに信念のまだ若い者は云ふ。平素亂暴なものが急に眞面目な態度をするのは偽善だと笑ふものがあるが、以つての外の心得違ひである。善い事は一刻でも一時でも好いから敢て行へ。敢て行ふ處に自然と人格化するのであるから。だから托鉢の時も誠心誠意でありたいのだが、たとへ誠心誠意でなくても芝居氣分でもやらぬよりは好いから嚴にするが好い。

また托鉢の時ばかりの爲めの話でない。山内に於ても一即一切一切即一で、一人が善ければ全部の爲めとなり、一人悪しければ全部の品位が下る。だから一人一人が此修行道場の全責任者であると深く感じて貫はねばならん。之れは東洋全體の短所と云はれてゐるところの、私徳は割合に發達してゐるが、公德は甚だ發達してゐない。困つた事だ。殊に菩薩は正法眼藏涅槃妙心を以つて自分を磨くと、もに他を教化するのが主眼であるから、小さく云ふても一人一人

が此道場を擔つて居るのであるから、殊に正法將に地に墮んとする今日、益々其の志氣を發して貰ひたい。この道理の分明せないものは、己一人位がと云ふが、實は其の己一人が全體であり、一切であるから托鉢に歩くにも又手して歩くべし。袖は決して振りまはさぬ様に。また適度の間隔を取り左側を歩き雁行が亂れぬ様に注意する様、また人の通行を妨げぬ様に注意しなければならん。

點心先へ行つても其心得を失はない様に。次に食の取り様であるが、何時ぞやも皆と法事に行つて見て居てさう思つた。衲が雲水時代には食ふ事にも大いにケシ掛けたものだ。また大飯食ふのを自慢したものだ、が南北相法修身錄と云ふ書にその食物の粗細や食べ方や食量の如何で其の人の將來の貧富壽夭が明確にみな分明されると説いてある。佛法から見てもあれは決して非眞理でも針小棒大でもない。實にその通りであるから、餘計に食ふ事は此の道理が解つたら直ぐにやめなければならん。大食をすると十中八九は大低病氣をする。雲衲で病氣する者は十中八九の人は大食からである。吾人は常に積功累徳して道業を勵まねばならん。随つて不陰徳を恐れねばならんが、その不陰徳の内で大食と美食をする事が不陰徳の最も大なるものであ

ると親切に書いてある。南北先生の云ふ處一つとして反對すべき所はなく、我が正法因果必然の理から見て立派な眞理である。奕堂や悟由禪師や行誠上人も非常に陰徳を積まれたものだ。何を食つても美味い處は三杯迄だが、法事の席で皆の食ひ振りを見ると五杯も十杯も食ふので情けなくなつた。何うしてあゝ云ふ心得違をするのかと思つた。衲も二十五歳位で氣がついた。それ迄は大食するのを禪僧の自慢らしく教へられて來たものだ。見所は明確で立派な禪僧でありながら徳分をすつかり使ひつくして了つたものがある。實に惜い事だ。

世の中の所謂紳士連が汽車の二等で、良い洋服を着て威張つてゐる。但し其れを紳士と云ふて居るが、あれは狼や野獸の生れ更りで辨當を食ふのに三分の一程を食つて持ち歸りもせずまたコツツリと腰掛の下に置くならまだしもだが、ポーンとほうり出して如何にも此様な不味い物は食へぬ、家ではずつと美味しい物を食つてゐるぞと云はん許りの態度をするものを見受けるが本統にナグリ付けてやりたいと思ふことがある。少々だと勿體ないから棄てないで食つて了ふ方が良いと思つて居つたが、それが實は悪いので食ひ過ぎるよりは寧ろ棄てた方が良い。棄てると思はないで何處かに捨て與へると云ふ心で棄つれば禽獸虫魚か餓鬼に施すことにもな

る。それに二杯で適量の者が三杯も食ふのは何んにもならん許りか、却つて身體の害になる。吾人の渾身は勿體なくも、正法の身であり、法器であり、國家社會の身であり、天地の身である。私一人の身でない事を思ふて充分自重しなければならん。

食ひ物の事を言ふと或は曲げて解せられる恐れがあるが、どうか僻み根性を出さないで聞いて貰ひたい。決して物を惜んで云ふのではない。大法相續の身體が大切だから云ふのである。成るべく美味しい物を作らぬこと。それは經濟である許りでなく食ふ者が福德を損ずる事になるから。また點心所などでは成るべく飯一杯で止めても膳の上の物は残らぬ様皆頂く様にする方がよい。信施者を満足させる一つの大切な道であるから。

また自強術なんかでも云ふ様だが人間が少食許り取つてゐると胃が小さくなつて榮養を十分取れぬ様になる。それだから時には鱈腹食へと云ふけれど信ずるに足らない。また斷食を時々實行すると好い道理もある。そこで自強術などでは一週間に一度朝は斷食、晝は粥をあつさり、晩に消化のよい淡泊なものを鱈腹ウンとやれと云ふがこれは全く必要のないことである。斷食をタマサカ實行するのは好いが鱈腹食へる必要は斷じてない。佛法から云ふても全く其の

通りである。悟由禪師は十八歳頃から、ずうーと小さい茶碗で二杯しか食はれなかつたが、よく肥満してあの通りツヤ／＼した身體をして居られた。柄は小さい時から大食をしたから罰が當つて、胃腸が弱くなつて此様な身體になつてしまつたのであるが、然し前世の福分の御蔭で兎に角斯うして居られる。

胃腸さへ完全であれば身體に必要なだけは必ず立派に消化する様に出來て居る。その器を損じなければ抵抗力が具つてをるから、チブス菌でも肺病の微菌にでも冒されるものではないのである。それだから點心等に行つても餘り食過ぎない様にして貰ひたい。食ひ過ぎは實に不陰徳の極である。

善根山上一塵も積むべし功德海水一滴も漏すなかれ

夜もすがら唱ふる三世の御佛の御名は昔の我名ならずや

一口に飲みなる水の味はひを問ふ人あらば如何に答へん

二、森田悟由禪師の德行

九四

森田悟由禪師は近世希出の高徳の方であつた。たしか明治三十八年頃の事かと思ふ。禪師が不用意に仰せられた一つの有益なる言葉がある。曰く

「各自陰徳を積まねばならぬ。其中三寶物は最も大切にしなければならぬ。お經には三寶物互用の罪と申す事がある。慎しむべきことである。殊に三寶物を在家の人に漫りに使用させぬ事である。何となれば三寶物の徳に負け却つて在家の人は徳を損する次第であるに仍つて深く慎しまねばならぬ。僧侶は財物を在家に施すべきものではない。在家の信施を受けてそれに因つて衣食し、法を施すべきである。在家は財物を三寶に供養して福田の利益を受け法益を受けるのが當然、されば徳高き三寶物を在家に用ゆれば其徳を損するが故に却つて爲めにならぬのである。此故に「私は兩親の所へは手拭一筋も未だ嘗て持つて行つた事はない」といふ一言を拜聴して、禪師の法を信じ給ふことの如何に深き、向道の志操の如何に堅實なる且つ御兩親に對する至情の如何に廣大なるかを拜し實に感激した次第である。私共の如きも其の道理は深く信ず

るのであるが、悪いと知りつゝ三度に一度は菓子の一箱も持つて行かずに居られぬのが弱き人情である。

依つて思ひ起すことがある。人あり往々問ふて曰く、どうも一子出家すれば九族天に生ずるまでお經にあるのであるから子供が出家すれば其家は特に繁昌すべき筈であるのに、事實は往々に反して僧侶を出した家は結局衰微する様に思ふ。その一つには三寶(殊に僧侶)に狎れて尊敬することを忘れる事が多い。また多少其の家から出た僧侶が學識徳望が高いと、他の僧侶を輕賤すること甚しいやうになる。是れは實に不陰徳の大なるものであることを知らないのと、今一つは家から僧侶を出すと今述べたやうに三寶物を漫りに使用することを免れ難いものである。故に其の家徳を次第に損するやうになる。此の二つの理由の爲に僧侶を出すと、精神的にも物質的にも其の家繁昌すべくして却つて衰退するやうになる所以であると深く信じて疑ふ餘地はないのである。

然し斯る事を言ふと唯物眼に執はれた卑しい人々には信じ難いので、知らず識らず方今は此の恐るべく慎しむべきことを等閑に附するやうになり、又その不祥事も事實多くなりつゝある

九五

のは甚だ氣の毒に感ずる次第である。

併し僧侶自身から斯ることをいふと、何となく巧に御都合の好い口實だと世間から思はれるのを恐れ、多くの僧侶は明かに此の意旨を宣傳することを憚る様になつたのは遺憾の極みである。

衆生根氣不同。大聖設教亦復非一。不可偏執一法。相互是非。

峰の色谿の響もみなながら我が釋迦牟尼の聲と姿と

▷集筆隨感隨◁
(附 奥)

昭和十年八月三十日印刷
昭和十年九月三日發行
定價金貳拾五錢 (送料四錢)

著 者 原 田 祖 岳
發 行 者 加 瀬 喜 一 郎
印 刷 者 庭 野 民 一
印 刷 所 東京市芝區今入町七番地
大 耕 社 印 刷 部

不許複製

發行所 東京市丸の内二ノ六 電話丸の内三二八六番正
八重洲ビル二〇一號 振替東京四一〇一一番信
發賣所 東京市本郷區赤木町 電話小石川四一八二番
二丁 振替東京八二一九番 森江書店

369
67

終

